大亜細亜

創刊号
平成28年6月30日
大アジア研究会

〒2790002 千葉県浦安市当代島1-3-29 アイエムビル5F（☎047-352-1007）

代表　折本龍則
副代表　小野耕資
顧問　坪内隆彦

『大亜細亜』創刊の辞

欧米型の政治経済システムの弊害が世界を覆うようになって久しい。それはデモクラシーとキャピタリズムの限界として露呈してきた。しかも、問題は政治経済に止まらず、人類の生命・生態系を脅かす様々な領域にまで及んでいる。

人間生活を支える相互扶助・共同体機能の喪失、精神疾患の拡大に象徴される精神的充足の疎外、地球環境問題の深刻化などは、そのほんの一例に過ぎない。これらの問題の背景にある根源的問題を我らは問う。それは、行き過ぎた個人主義、物質至上主義、金銭至上主義、効率万能主義、人間中心主義といった西洋近代の価値観ではなかろうか。

これらの価値観は限界に達しつつあるにもかかわらず、今なお、大亜細亜へ浸透しようとしている。新自由主義の大亜細亜への侵食こそ、その具体的表れである。亜細亜人が、時代を超えて普遍性を持ちうる、伝統文化・思想の粋を自ら取り戻し、反転攻勢に出る秋である。今こそ我らの生命と生態系を守るとともに、文明の流れ自体を変えなければならない。

かつて大亜細亜の英雄たちは、列強による邪悪な植民地主義に立ち向かい、西洋近代文明と正面から対峙した。頭山満を中心とする玄洋社が亡命亜細亜人に協力したことに示される通り、境遇と志を共にする亜細亜人が民族を超えて連帯した。それは大亜細亜主義、興亜論として大きな思想潮流をなしていた。しかも、皇道政治、皇道経済の提唱に見られるように、先覚者たちは國體に則った政治経済の在り方を模索し、欧米型政治経済システムの超克を目指した。

メッカ巡礼を二度敢行した興亜論者田中逸平は、「大亜細亜」の「大」とは領土の大きさでなく、道の尊大さを以て言うとし、大亜細亜主義の主眼は、単なる亜細亜諸国の政治的外交的軍事的連帯ではなく、大道を求め、亜細亜諸民族が培った古道（伝統的思想）の覚醒にあると喝破した。大道への自覚と研鑽、伝統の回復こそが大亜細亜の志なのである。

國體の理想に基づき国内維新を達成し、亜細亜と道義を共有していくことが、我らが目指す道なのではなかろうか。それが「八紘為宇の使命」にほかならない。

興亜の先覚荒尾精は「天成自然の皇道を以て虎呑狼食の蛮風を攘ひ、仁義忠孝の倫理を以て射利貪欲の邪念を正し、苟くも天日の照らす所、復た寸土一民の　皇沢に浴せざる者なきに至らしむるは、豈に我皇国の天職に非ずや。豈に我君我民の　祖宗列聖に対する本務に非ずや」（『対清弁妄』と説いた。

残念ながら、わが国は大東亜戦争に敗れ、占領期の言論統制を経て、大亜細亜の理想は封印された。崇高なる民族的使命を忘却し、政治家たちは目先の政局の動向や経済成長率、株価の動向に一喜一憂し、真摯に向き合うべき理想を忘れている。

今こそ日本人は、「天孫降臨以来の我が国の天職」たる大亜細亜の理想を回復し、文明転換の流れを率先して牽引すべきである。大亜細亜の理想の封印を解くため、今本紙を創刊する。

〈本号目次〉

一面　笠木良明と『大亜細亜』
五面　アジア主義に生きた杉山家の伝承
八面　王道を貫いた大二輪朝臣衛
十一面　陸羯南のアジア認識
十二面　大アジア主義の総説と今日的意義
十七面　インド哲学とシャンカラ
二十面　時論「価値観外交」の世界観から「興亜の使命」へ
二十一面　史料『興亜会設立緒言』
二十二面　大亜細亜医学のなかの日本①／リカルド生誕一五〇年

笠木良明と『大亜細亜』

（顧問）坪内隆彦

わが国の近代化を再検証すべき

今から八十三年前の昭和八年四月、大亜細亜建設協会（後に大亜細亜建設社）の機関誌として『大亜細亜』が発刊された。それを主導したのが、満州に王道楽土の理想を掲げた笠木良明である。

笠木の理想が、欧米列強の帝国主義に象徴される西洋覇道に対する東洋王道の理想の堅持であったことが最も重要である。私たちはいま、アジアと向き合うに当たり、西郷南州の精神敗北後の近代化路線、その路線によって推進された日清戦争にまで遡って、わが国の近代史を再検証する必要があるのではなかろうか。

笠木は、明治二十五（一八九二）年七月二十二日、栃木県足尾町松原で生まれた。栃木県立宇都宮中学校、仙台第二高等学校を経て東京帝国大学法学部に入学、大正八年七月に卒業すると、満鉄に入社、在東京東亜経済調査局に配属された。当時調査局にいた大川周明らとの出会いによって興亜思想に目覚めた笠木は、猶存社に参加する。ここで笠木は、大川のみならず、北一輝、満川亀太郎らから強い影響を受けたと考えられる。

笠木の普遍的思想の萌芽を確認する上で、大正十四年八月『日本』に発表された「愛国

の唯一路」は格好の材料である。ここで笠木は頑迷な愛国者を批判し、「我等の愛国心は厳正雄渾なると共に聡明なるを要す。我等の愛国心は栄螺固陋ではなく、祖国より始めて全世界を真正調和裡に導く所の一切を包括し解決する魂」だと書いている。満川と同様に、彼は興亜の前提としての日本改造を重く見て、日本は「まづ第一に道義的に資格ある自国自身の正義化を大眼目として活動すべき」と説いていた。

笠木良明

さて、笠木は昭和四年四月に東亜経済調査局から大連の満鉄本社に転勤することになった。笠木は満州情勢が動き出す中で、大連を中心とする同志を集めて議論を開始した。

一方、笠木と盟友関係を築くことになる中野琥逸は、京大時代に猶存社に参加し、行地社時代には関西行地社を結成、さらに猶興学会を結成して同志の輪を広げていた。昭和二年に奉天で弁護士を開業、やがてここは満州を志す青年たちの拠点となった。中野は、同志の庭川辰雄、江藤夏雄らとともに、満蒙に道義国家を建設する構想を抱き、奉天特務機関や関東軍と連絡をとるようになっていた。

もともと中野と面識のあった笠木は両グループの交流を進め、昭和五年秋一大結集へと向かう。十一月のある日、大連の笠木仮寓の床の間に飾ってあった書幅「独座大雄峯」に注目が集まった。「独座大雄峯」は、唐代の禅師百丈懐海が、「有り難いこととはどういうことですか」と問われた際に発した言葉で、「自分が一人、この山に座っている事ほどありがたい事はない」ほどの意味である。この書に因んで、笠木・中野連合は「大雄峯会」と名付けられた。

昭和六年九月十八日に満州事変が勃発すると、大雄峯会周辺は緊迫度を増していく。事変からちょうど一カ月後の十月十八日、大雄峯会は奉天の妙心寺で総会を開き、板垣征四郎、石原莞爾ら関東軍幕僚らと対面する。石原は「満蒙問題の解決はもはや言論や外交では不可能であるから、満鉄沿線を対象として理想境域を建設することによって実績で証明するよりほかにとるべき方法はない」と語り、大雄峯会に協力を求めてきた。笠木らは石原の提案に賛同し、自治指導部設置に向けた方針策定を急いだ。そして、大雄峯会と満州青年連盟の案を統合した「地方自治指導部設置要項」が決定され、十一月一日自治指導部が発足した。大雄峯会、満州青年連盟からそれぞれ七名ずつが参加し、笠木は連絡課長に、中野は顧問に就任した。

稀有の大文章「自治指導部布告第一号」

いよいよ、笠木がその理想を体現するときが来たかに見えた。まず彼は、全身全霊で「自治指導部布告第一号」を起草した。

「自治指導部の真精神は天日の下に過去一切の苛政、誤解、迷想、紛糾等を掃蕩し竭して極楽土の建立を志すに在り、茲に盗吏あるべからず、民心の離叛又は反感不信等固より在らしむべからず。住民の何国人たるを問はず胸奥の大慈悲心を喚発せしめて信義を重んじ、共敬相愛以て此の画時代的天業を完成すべく至誠事に当るの襟懐と覚悟あるべし。謂ふ所の亜細亜不安は軈て東亜の光となり、全世界を光被し全人類間に真誠の大調和を齎すべき瑞兆なり。此処大乗相応の地に史上未だ見ざる理想境を創建すべく全努力を傾くるは、即ち興亜の大濤となりて人種的偏見を是正し、中外に悖らざる世界正義の確立を目指す」

「世界史の実践課題に向って巨歩を印した稀有の大文章」（井上実）と評された通り、笠木の崇高な理想が余すところなく示されている。

十一月半ば過ぎから、自治指導員たちは二名一組となり、奉天省内の二十一県に入っていった。どの県でも張学良に任命された地方官吏が逃亡してしまい、無政府状態に陥っていた。指導員たちは、匪賊討伐、窮民の救済、借金の世話、学校開設、不良日本人の摘発など、あらゆる問題に対処しなければならなかった。

しかも、任地に赴く際、軍隊や警察の保護などなかった。彼らは、一切武器も持たず、果敢に住民の中に入っていったのである。指導員のほとんどが、笠木の説く理念に殉ずる覚悟を持った者たちだったのだろう。

昭和七年三月一日の満州国建国に伴い、自治指導員は県参事官に再編された。このとき、笠木は独自の構想を描いていた。新たに資政院を設け、県参事官の人事を司掌するとともに、建国理想の原理的究明のため研究部を設置するというものだ。笠木が研究部に渡辺海旭、田崎仁義らとともに招こうとしたのが、宮島大八であった。

勝海舟―西郷南州―宮島大八の文明観

笠木は、「覇道あることを許さぬ真人」としての宮島大八の生き様に強く惹かれていたのである。大八の魂は、勝海舟の魂であり、あるいは西郷南州の魂でもあったかもしれない。

大八の父宮島誠一郎は、南州、海舟と極めて緊密な関係にあり、西洋近代の覇道主義とは異なるアジアの道義を追い求めた人物である。明治十一年九月二十四日、南洲の「逆賊」の汚名が未だ晴れぬ中、誠一郎は副島種臣らと密かに西郷一周忌を開いている。翌明治十二年に東亜振興を目的に設立された「振亜会」（翌年「興亜会」と改称）の中心人物

として運営に当たった。

慶應三（一八六七）年十月二十日に生まれた大八は、興亜会の「興亜学校」で中国語を学び清国に留学、日清戦争勃発に直面し、明治二十七年悲嘆のうちに帰国した。彼が真っ先に訪ねたのが海舟だった。そして大八は、日清和親の重要性を説く海舟の考え方に傾倒していったのである。

松浦玲氏が『明治の海舟とアジア』で指摘しているように、海舟は、南州が江華島事件を批判した篠原国幹宛書簡（明治八年十月）に基づいて、南州は征韓論者ではなかったと主張するようになる。海舟は、南州に独自の文明観を仮託し、伊藤博文らが進める欧米型近代化路線に抵抗し、同時に日清戦争にも反対の姿勢を鮮明にしたのだった。それにぴたりと歩調を合わせていたのが誠一郎であった。

海舟は、日清戦争の講和においては、領土割譲に反対し、独自の中国論を展開している。「支那人は治者が誰であろうと頓着しない」「支那は国家ではない。ただ人民の社会だ」と述べる一方、次のように中国との連携を説いている。

「支那の実力が分かつたら最後、欧米からドシドシ押し掛けて来る。ツマリ欧米人が分からないうちに、日本は支那と組んで商業なり工業なりやるに限るよ。一体支那五億の民衆は日本にとつて最大の顧客サ。また支那は昔時から日本の師ではないか。それで東洋の事は東洋だけでやるに限るよ」

注目すべきは、笠木が明治政府の政策に抵抗する海舟の主張に思いを寄せていたことである。『大亜細亜』には、海舟のアジア外交論が掲載されていたのである。昭和十一年七月には、宇佐彦麿が「海舟先生の対支意見」を寄せ、「今や我国は国際政局上危機に際会し、殊に対支問題が最重大化してゐる時、先生の対支意見を紹介して先人の見識を回顧玩味するのも意味多いことゝ思はれる」と述べて、日清韓三国の連合策、日清戦争後の講和における領土割譲に対する反対論、対支優越感への批判等、海舟の主張を整理した。さらに、昭和十二年二月には角田貫次が「海舟先生東方意見抄」と題して、再び海舟のアジア外交論を紹介している。

支那事変の拡大に直面し、海舟の議論を見直そうという機運があったとも推測されるが、笠木は二人の人物から直接海舟の思想を継承していたと考えられる。一人が、海舟の直弟子であった、笠木の友人松崎鶴雄であり、もう一人がほかならぬ師大八であった。

国家運営の論理の壁

資政院を設け、宮島大八らを配して研究部を設置するという笠木の構想は、国務院法制局長代理の松木俠らが強く反対し、頓挫した。結局、国務院の一局として資政局が設けられることになり、参事官人事は国務院民政部総長の所管となった。資政局と県参事官の制度上のつながりを断ち切られたのである。研究部構想も実現しなかった。

それでも、笠木は資政局訓練所の所長となり、参事官たちを大亜細亜建設の使徒となるべく鍛えあげていった。彼は、参事官が日本改革の先駆者となり、やがては大亜細亜建設の中心的使徒となることを期待していた。彼は満州建国の根底を宗教的な基盤に置き、そこに働く者が伝道布教をなすような大導師たることを求めていた。それは、皇道精神の体現でもあった。

笠木は、参事官の大使命とは、明治天皇の御製「よきたねをえらびえらびて教草うゑひろめなむのにもやまにも」に示された大精神を奉持して、これを実践することだと信じていたのである。

笠木のもとに参じた大雄峯会の坂田修一は、笠木は「名も要らず、命も要らず、ひたすら国のため、道のために挺身し得る青年が全満州の隅々に配置せられて、これらの青年が明治天皇の御遺徳を奉戴し、原住民と心から相結んで、道義社会の建設に精進するならば、大乗相応の極楽土建設は必ず出来る」と信じていたと振り返る。

だが、建国からわずか四カ月後の七月五日、突如資政局は廃止され、笠木ら十数名の幹部はいっせいに罷免されたのである。井上実は「これは一種のクーデターであった」と振り返る。

作家の立野信之は『洛陽』で、笠木一派が一大官僚閥を形成し弊害が起こるから、資政局を解散させたと書いた。しかし、それは事実とは全く逆である。機構制度上、参事官の総元締めだった駒井徳三との対立が引き金になっていたことは、ほぼ間違いない。参事官たちは、駒井のところには寄り付かず、笠木精神になびいていたのである。だが、事の本質は、笠木のあまりにも崇高な理想が関東軍には邪魔だったことである。奥野彦六は、「君（笠木）の志した満州建国の理想は武力と覇道の行使を排し、純然たる王道主義を行ふことであったのである。心より弱者の友となり、覇道・権道を打破せんとする戦を挑んだものこそ君なのである」と振り返った（『笠木良明遺芳録』二百五十四頁）。

資政局で弘法（広報）に従事した石原厳徹は、「笠木派の人物は、純情熱血漢が多く、文字どおりの〝王道楽土〟建設を念願して、地方の県参事官になった者は、なにごとも人民（いわゆる満人）の利益を第一に考えて、軍の無理な要求には強く抵抗した。軍の立場は〝王道楽土〟は看板だけで、対ソ戦略のために満州を強力な軍の基地にすることが目的であるから、その目的のために、人民の利益などにはかまっていられない」と書いている。笠木の理想は国家運営の論理の前に敗北したとも言える。それは南州の敗北を髣髴とさせる。

在野の立場から死守しようとした参事官精神

資政局廃止が決まった日、笠木派の沢井鉄馬宅に二十数名が集まっていた。玉砕を期して関東軍の反省を求めるということでほぼ話がまとまりそうだった。この話合いを、東亜同文書院を経て大雄峯会に参加した蛸井元義は終始沈黙して聞いていたが、最後に発言し、玉砕を期して飛び込むことは軍の思う壺だと主張し、「もしそうなった時に、一体誰がこの精神を継ぐのか」と問いかけた。そして、隠忍自重して、建国の大精神を護持発揮してほしいと語った（『遺芳録』三百三十七）。参加者たちは蛸井の提案を受け入れ、まずは自重し再起を期すことにした。

この間、笠木は自らの処遇は問題ではなく、天業成就に尽くすのみとして、在野の立場で参事官精神の維持に取り組むことを決意していた。日本に戻った笠木が昭和八年四月に設立したのが大亜細亜建設協会である。そして、機関誌として『大亜細亜』が創刊されたのである。同月二十日、同誌発刊祝賀会を兼ね、日比谷山水楼で催された笠木良明慰労会には、宮島大八、五百木良三、満川亀太郎、中山優、綾川武治、永井了吉、高村光次ら百八十名が参加した。

いったん野に下った参事官たちの大半は官に服し、笠木精神を再び掲げようとした。参事官たちは上京するたびに、笠木を訪ね薫陶を受けていたのである。

月刊雑誌
大亜細亜
昭和八年五月創刊
一部三十錢 郵税一錢 滿支海外一部三錢
◇滿洲國建設の最高權威
◇亞細亞興起の唯一指針
◇滿洲建國道士の外護機關
笠木良明著
一部十錢 郵券代用可
滿洲國縣旗 參事官の永久的使命
附 滿洲國行政組織一覽表
大亞細亞建設社 發行

『大亜細亜』

昭和九年一月、関東軍を揺るがす土龍山事件が発生する。関東軍は、吉林省東北地区で大規模な移民用地買収工作に着手し、現地人の土地を不当に安い価格で買い上げ始めていた。ところが、三月九日、これに反発した住民約一万人が武装蜂起、日本軍連隊長以下二十一名が犠牲となったのである。このとき、笠木派の参事官たちは現地農民と連携し、軍、政府の反省を促している。

同月二十三日に開催された第一回全満県参事官会議は、この事件の直後とあって、大荒れとなった。雙城県参事官の任にあった蛸井元義は、「速やかに王道研究所を設け、建国理念の根本を確立せよ」と迫った。大雄峯会出身の副島種参事官は、仁徳天皇の〝民のかまどの煙〟を引用して、政府に仁政の心構えを説き、ついには激して遠藤柳作総務庁長を叱咤したという（藤川宥二『実録・満州国県参事官：大アジア主義実践の使徒』九十一頁）。そして、甲斐政治参事官が、土龍山事件に言及し、軍、政府の責任を追及するや、場内の空気は緊迫、殺気さえ感じられるほどであったという。捨て身で笠木精神を守り抜こうとする参事官たちの熱意が伝わってくる。

ちょうど同時期、笠木精神を体現すべく、蛸井は坂田修一らとともに、参事官自治会（後の興亜自治会）を設置、その道場として、各省公署所在地に自治会館（後の興亜会館）、各県に興亜塾を設けることを決めた。参事官が相互に経験を交換し、自ら修養しようとしたのである。塾には必ず神明の間または祭壇を設け、興亜の理想の下に他界した同志の英霊を祀った。昭和十四年四月には、小石川区水道端町に「皇都興亜塾」が開塾されている。御鏡の上段中央に「東亜先覚志士霊位」の位牌を安置し、その右に「満州建国殉道者霊位」を、左に「支那事変殉道者霊位」の位牌を安置し、それに満州国参事官犠牲者三十二名の写真を並べ祀った。

この間、石原莞爾は、昭和十二年に支那事変が起こると不拡大方針を唱え、当時関東軍参謀長東條英機ら陸軍中枢と対立し、同年九月に参謀本部から関東軍参謀副長に左遷され、再び新京に着任してきた。

中央集権的行政機構の強化という目的で、昭和十二年十二月一日に県参事官が副県長と改称されると、石原は「関東軍内面指導の撤廃」の意見書を関東軍司令官につきつけた。東條との対立は決定的となり、翌年参謀副長を罷免される。笠木は、資政局解散時に関東軍にいた石原に批判的だったが、両者の思想は王道楽土を目指すという点で収斂していたのである。笠木の同志、片岡駿は、もっと早く二人を結びつけられていたなら日本の歴史は違ったものになっていたと悔んだ（『遺芳録』四百三十八頁）。

結局、笠木や石原の抵抗も空しく、王道楽土建設の理想は押しつぶされていったのである。笠木は敗戦による満州国崩壊をどのような思いで見たのだろうか。

笠木精神が貫徹されれば、満州国は理想郷として発展したかもしれない。笠木精神を信じて行動した斎藤進次郎は、笠木精神を体現した資政局が健在だったならば、満州国の歴史的運命は、日本の運命と同様に別個のものとなっただろうし、不幸な日支事変、大東亜戦争も回避できたと言う（同三百四十一頁）。同志の雨谷菊夫も、五・一五事件の橘孝三郎や笠木の理想が実現していたら、大東亜戦争が起こったとしても全く別の様相を呈していたと主張する（同三百三十六頁）。さらに、渤利県参事官を務めた明石勝利は、日本軍首脳に笠木のような宗教的哲学的情操があれば、敗戦の悲運は避けられたと明言する。

戦後、笠木は極東国際軍事裁判に証人として喚問された。そのとき彼は、「王道理想郷を建設するため不惜身命の菩薩行を行ぜんとしたのが同志一統の志願だった」と、誰よりも堂々と陳述することができた。彼は、戦後も日本の維新と興亜の理想を失うことはなかった。

昭和二十八年五月十三日、紫山塾の本間憲一郎らの呼びかけで、愛国運動の大同団結を目指した救国懇談会が水戸弘道館で開催された。笠木は、この会合に大川周明、三上卓、中村武彦、片岡駿らともに参加し、持論を説いた。このとき笠木の情熱に胸を打たれた片岡は、笠木との連絡を重ね、笠木を最高指導者として運動を展開しようとした。だが、「既存の愛国団体を中心とする運動によって日本を再建することはできない」として笠木は固辞したという。

笠木は、「祖国日本を憂うる無数無名の国民がいる」という確信に基づいて、未知の同志大衆の結集こそが日本再建の早道と考えたのである。昭和三十年一月に笠木は「国民同志社」を結成し、地方の同志獲得に奔走した。だが、同年九月二十二日、ついに力尽き、六十三年の生涯を閉じた。「国民同志社」に協力した中村武彦は、次のように書き残している。

「清高酒脱の風格の奥に日本の維新と興亜の理想を抱きつづけ、日本の現状に対する義憤は止む時がなかった。ただ、それは右翼者流の単なるかけ声や空騒ぎだけの愛国運動反共運動の類に発散して快しとする底の浅薄なものでなく、その理想を同じくする人材を求めて固く広くむすびを作りたい、その情熱を若い世代にひき継がせたいという念願に、『老いのまさに至らむとするを知らぬ』切々たる努力を続けられたのである」

〔大亜細亜建設社から刊行された書籍〕

笠木良明『満洲国縣旗参事官の永久的使命』昭和十年

衛藤利夫『満洲生活三十年―奉天の聖者〝クリステイ〟の思出』昭和十年

金崎賢『国体明徴と日本憲法の解釈』昭和十一年

大林一之『対支平和国策に関する建議』昭和十二年

佐藤富江著『蒙漢合璧釈尊聖伝』昭和十三年

須田正継『世界回教徒の動向』昭和十三年

若宮卯之助述『時局と猶太人問題』昭和十三年

『大黄河治水事業に就て』昭和十三年

大林一之『支那事変処理に関する私案』昭和十四年

笠木良明『青年大陣容を布地せよ』昭和十五年

梁漱溟著、池田克己訳述『郷村建設理論』昭和十五年

河飯捨蔵『新世界理論』昭和十六年

梁漱溟著、池田篤紀訳『中国民族自救運動之最後覚悟』昭和十六年

大野鉄次郎『満洲建国殉皇烈士墓参行脚記』昭和十七年

アジア主義に生きた杉山家の伝承

杉山満丸

私は杉山満丸といいます。

「なぜに、無名の私がここへの投稿を許されたのか？」と不思議に思われる方も多いと思いますので、私の家の紹介をさせていただきます。

私の父は、「インド緑化」を実践した杉山龍丸。祖父は、作家・夢野久作。曽祖父は、杉山茂丸と言います。杉山茂丸は、私にとって巨大すぎてまだまだ全体像が把握できているわけではありませんが、アジア主義の巨頭、玄洋社の頭山満翁と五十年に亘って盟友関係にありました。そして、帝国ホテルで「金菊の祝い」というものをさせて戴きました。（写真）その時の列席者名簿やお祝いに二人に贈られた短刀や胸像が今でも遺っています。（短刀と胸像は筥崎宮蔵非公開）

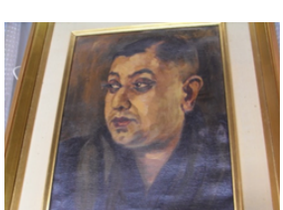
金菊の祝い写真

茂丸氏胸像

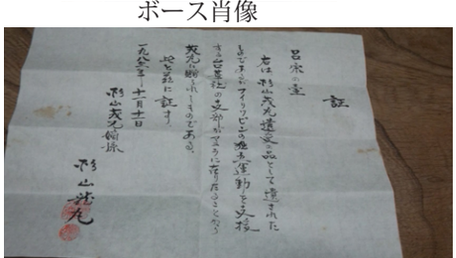
記念の短刀

それから、孫文の結婚式に頭山満・犬養毅・宮崎滔天とともに列席させていただいたそうです。小坂文乃著「革命をプロデュースした日本人」（講談社）

また、インドから日本に亡命していた、インド独立の志士ラース・ビハリ・ボースの神隠し事件の際に、ボースを頭山満邸から新宿の中村屋まで運んだ車は杉山茂丸のものであったそうです。我が家にはボースの肖像画が遺されています。私が小さい時に、家のトイレに続く廊下にこの肖像画が飾ってあり、夜トイレに行くのが非常に怖かったという記憶があります。



ボース肖像



龍丸氏書状

最近、父杉山龍丸が書き遺した書面が出てきました。その書面には、フィリピンのマニラに曽祖父が運営していた台華社の事務所があり、フィリピンの独立運動家たちと交流があったと書かれています。

私が生まれてすぐの写真があります。

この写真で赤ちゃんの私を抱いているのは、末永節という人物です。末永節という人物は、孫文とともに辛亥革命を戦った人物です。末永節さんが彫られた夢久庵（夢野久作の書斎名）を前に、幼い私ともいっしょに写真を撮っていただいています。その次の写真は、父・杉山龍丸と一緒に撮られた写真です。

赤子の筆者を抱く末永節

幼少の筆者と末永節

父龍丸と末永節

孫文（右端）と末永節（左端）

私の人生は、アジア主義の実践者に抱かれて始まったということになります。

末永節さんの米寿の祝いには、大陸からも台湾からもお祝いのメッセージが届いたそうです。写真は、米寿の祝いの時に作られたものです。拡大すると、すべての名前を読むことができます。

米寿祝賀会記念名簿

その中には、今でいうところの、保守系の方の名前も革新系の方の名前も見ることができます。

また、一昨年、杉山龍丸が書き遺した「中国革命日本人支援者名簿」が杉山家の資料の中に遺されていることが判明しました。この資料は、末永節さんから託され、それを父・杉山龍丸が出版しようとしたものではないかと考えられています。そして、その中には神戸の孫文記念館の名簿にも記載がない人々の名前が含まれています。

現在、作家の浦辺登さんによってどのような人物なのかという確認作業が進められています。

私が、物心がつく頃から毎年のようにインドの人々が私の家にやってきました。そして、その頃から、私の家の周りの山林は宅地へと変わってゆきました。私の家があったのは旧杉山農園です。杉山農園は、曽祖父杉山茂丸が浄財を集め、玄洋社の若手の鍛錬の場、そして、アジア各国が独立した時に国の基礎となる農業指導者を養成する場をつくる目的で開園されたと伝えられています。曽祖父・杉山茂丸は、祖父・夢野久作に「慶應義塾大学文学部を中退し、農園の土地を確保し、農園経営を行う」ことを命じ、夢野久作はその言葉に従い、福岡に帰ってきて農園経営に取り組んだと伝えられています。

私の父・杉山龍丸は、「杉山農園は杉山家の私物とすることはならない。アジアのために使え」という曽祖父と祖父からの遺言を一生かけて実践したと私は思っています。

父は、幼い頃、ラース・ビハリ・ボースに会って、「私は母国インドに帰ることができないが、大きくなったら素晴らしい国インドを訪ねてみないか」と言われたそうです。「その言葉が、心にずっとあったからインドに来た」とインドの人々に語ったそうです。

私が高校二年の時に父から誘われて、初めてインドに向かいました。インドに着くと父は「お前を何で誘ったかわかるか？」と聞いてきました。「わからない」と答えると、父は、「お母さんが俺の女がインドにいるのではないかとうたぐっているから、お前を誘った」と言って、苦笑いをして見せました。インドに一週間滞在した後、父は私を私の家に何度も来ていたガンジー塾のリーダー達に預けて、国連へと旅立ってゆきました。私は、ガンジー塾のリーダーたちから、ちょうどバトンをリレーされるようにインド各地にあるアシュラムというガンジー塾の施設を回りました。

ガンジー塾のメンバーと筆者

当時のガンジー塾は大きく二つに分かれていて、ガンジーの教えを実践し、貧しい人々の生活が少しでも良くなるように努力している人々とガンジーの弟子であることに満足し、その立場を利用して地位や名誉を求める人々に分かれつつあるようでした。もちろん、父が付き合っていたのは前者の人々です。

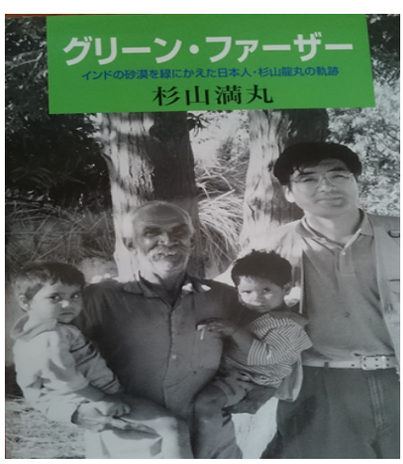
アシュラムに着くと、最初に、「ナショナルソング　プリーズ」と言われました。英語が苦手な私が辞書を引くと、そこには「国歌」と書いてありました。私は「君が代？」と思いながら、覚悟を決めて、歌い始めました。すると、突然、その部屋に居たすべての人々が直立不動の姿勢をとられました。びっくりした私は、私も直立不動の姿勢をとり、「君が代」を最後まで歌い切りました。すると、

直立不動の姿勢のまま、今度はインドの方々が、誇らしげに、本当に誇らしげに、大きな声で、歌い始められました。「インド国家?」と思いながら、私は、内心びっくりしながら、その誇らしげな声に耳を傾けました。

日本に帰ってきてから、父にこの話をすると、父は「今の日本人にはわからないかもしれないけど・・・。」と前置きして「インドは長いあいだイギリスの植民地だった。そのために、自分たちが努力して作り上げられたものも自分たちのものにならず、搾取された。また、イギリス人がインド人を殺しても、インドの人々は自分たちの法律で裁くことができなかった。インドが独立し、インドの人々は、自分たちが作り上げたものが初めて自分たちのものになり、自分たちの子供たちや自分たちの子孫に残せることを初めて経験し、実感している。自分たちの国があることによって生じる様々な体験を通して、自分たちの国があることの幸せを実感しているんだよ。だから、自分たちの国があることの象徴である、国旗や国歌を大切にしているんだ。」と教えてくれました。

そんな私が、アジア主義について考えるようになったのは、ここ数年のことです。私が三十一歳の時に、すべての財産をインドでの活動に投じて父が亡くなった後、私は、自分の安アパートに父が遺した資料を積み上げ、それからの孤独な十年を過ごしました。だれも見向きもしない資料を持ちつつ、仕事に追われ資料が積み上げられたアパートに帰る日々が続きました。そして、私が四十を過ぎ、十年が経過しようとしていた一九八六年秋、一本の電話が私のところにかかってきました。それは、「水と緑のキャンペーン」をはじめていた地元の放送局のプロデューサーからの電話でした。「杉山龍丸さんの資料はありますか?資料が遺っていれば、それを基に杉山龍丸氏のインドでの足跡を訪ねたいと思います」この電話によって、私の十年に亘る孤独な戦いは終わりの始まりを迎えました。

私は俳優の田中健さんとインドに向かい、初めて、父が植林した地域を回りました。高校二年の時にインドに行った時には、インド滞在三日目から下痢に襲われ、それから二週間、下痢の症状がなくなるまで、砂糖とライムを絞った水が唯一の命綱となり、植林した地域への予定がキャンセルとなったからでした。父の資金が尽きて、父が最後にインドに行ってから十五年以上が経過していたにもかかわらず、各地で大歓迎を受け、毎日、父の偉大さに心を打たれ、涙を流す日々が続きました。同行した田中健さんも、インドの人々が歓迎する様子に心を打たれた様子でした。それは、同行していたインドの旅行社の添乗員も同じでした。ある晩、添乗員の方が、大きな声で、何かをテレビ局のプロデューサーに語り始めました。すると、プロデューサーが、私に向かって、「彼は今感動している」と教えてくれました。添乗員の方は、父の業績に疑いを持ち、ツアーに参加していましたが、その日に行った村の村長の態度を見て、杉山龍丸は本物だと思ったそうです。通常、取材に行くと、村長は法外な袖の下を要求するのが常なのに、今日は一切要求がなかったというのが、彼の主張でした。そして、「このような取材活動に同行できたことを誇りに思う」と言って、私に握手を求め、抱擁してくれました。



『グリーン・ファーザー』

日本に帰ると、田中健さんが、本を出さないかと言って、出版社を紹介してくれました。そして、「グリーン・ファーザー」という本を出版しました。このグリーン・ファーザーというのは、インドの関係者から言われた次のような言葉によるものです。

「満丸さん。福岡の杉山農園の緑はなくなってしまったけど、お父さんが植えた緑の子供たちは、インドですくすくと育っています。あなたの周りの緑は、すべてあなたの兄弟です。いつでも会いに来てください。インドの独立の父はガンジーさん。インドの緑の父グリーン・ファーザーは、あなたのお父さんです」

インドにて

王道を貫いた大三輪朝兵衛

浦辺登

大三輪朝兵衛について

大三輪（おおみわ）朝（ちょう）兵衛（べえ）という男がいる。出身地の筑前（現在の福岡県）でも彼の名前を知る人は少ない。むしろ、神道家・葦津（あしづ）耕（こう）次郎（じろう）の伯父と言った方が、少しは通りがよいかもしれない。

大三輪は天保六（一八三五）年六月四日、筑前・箱崎村（現在の福岡市東区箱崎）に生まれ、もとの名を大神（おおが）一貫（いっかん）といった。実家は代々、尚武の神・宮崎八幡宮宮司の家系だった。大三輪の父は大神（おおが）嘉納（かのう）を名乗り、母は福岡藩士・井上弥七の娘だった。遠い祖先には、宇佐八幡（大分県宇佐市）の創建に関わった大神比義がいる。宇佐八幡は和銅元（七〇八）年の創建と伝わる。そこから数えても、約一三〇〇年の歴史を誇る家でもある。

その大三輪が生を受けた頃、日本周辺には異国船が遊弋し、国内は飢饉に見舞われた。天保八（一八三七）年、大坂では大塩平八郎が義挙に及び、内外ともに不安定な時代だった。

大神家の苦難

大三輪朝兵衛には葦津磯夫という弟がいる。磯夫は神道家・葦津耕次郎の父で筥崎宮宮司だった。この大三輪、磯夫の兄弟は、幼少の頃、苦難に遭遇した。

江戸時代、幕府は五人組という仏教寺院を中心とした統治を行なった。神仏混交といいながら、神官もいずれかの寺院に属し、仏教集団の下部組織的扱いを受けた。幕末の頃、大三輪の伯父・大神多門は、神道復活を願い京の一条家を頼りとした。この頭越しの対応が福岡藩寺社奉行の怒りをかい、多門は玄界灘に浮かぶ玄界島に遠島となった。同時に、多門の弟嘉納（かのう）（大三輪の実父）にも累が及び、筥崎宮を追われた。大三輪の一家は、筥崎宮に近い箱崎浜の納屋小屋に移り住んだ。一家を哀れに思った漁師が提供してくれた住まいだったが、そこでの生活は乞食同然だった。

病弱の父・嘉納に代わり極貧生活を支えたのが大三輪だが、浜に流れ着く海草を集めては近隣の農家で米や野菜に交換。その野菜を博多の町に行商に行き、帰りには糞尿を農家に運んで野菜や米に換える。食事は拾った海草、大根葉を混ぜた粥をすする生活を送った。今も葦津家では、大三輪、磯夫兄弟が耐え忍んだ苦労を忘れないため、正月には大根葉の入った粥を食べると伝わる。

大志を抱き長崎に向かう大三輪

大三輪の幼少時の苦難は、敬神尊皇、神道祭祀の復古を伯父の多門が主張したことから生じた。しかし、その敬神尊皇、神道祭祀の思想は大三輪にも、弟の葦津磯夫にも絶えることなく伝わっていた。時代が明治という新しい世に近づくにつれ、ようやく、一家に少しずつ、明るい兆しが見え始めた。

大三輪は行商の合間、竹細工を売って九州遊学の資金を溜めた。寛永四（一八五一）年、大三輪十六歳の時だった。九州各地を見学する最終地は長崎だった。この当時、長崎には日本全国から向学心に燃える青年が集結していた。私費、藩費、篤志家の支援を受けた青年たちが長崎で蘭学を学んだ。出身地別に青年たちの名前を記した「長崎遊学者名簿」を確認すると、大三輪長兵衛の名前を見出すことができる。筑前、筑後、豊前という現在の福岡県出身者の欄には、貝原益軒（福岡藩儒者・本草学）、金子才吉（イカロス号イギリス水兵惨殺事件の犯人）、田中久重（発明家、東芝・創業者）、永井青崖（蘭学者、勝海舟の蘭学の師）等の名がある。

この長崎で、大三輪朝兵衛は確信することがあった。国の盛衰は通商交易によって大きく左右し、攘夷論だけでは日本の独立は危うい。真の独立のためには、開国して力を蓄えるべきと。

神職を磯夫に譲り、商人を志す大三輪

安政五（一八五八）年、正月。二十三歳になった大三輪朝兵衛は故郷の筑前箱崎を出て、大坂で商家の雇人となった。幼少の頃から浜辺の海草を集め、糞尿を野菜や米に換え、それらを売って生活をしていた大三輪だった。筥崎宮の神職を継げる立場だったが、弟の磯夫に譲り、大三輪朝兵衛は商人の道を選んだ。安定収入の道を選ぶことで、親族の生活を支えようという気持ちからだった。

商人としての才覚を評価された大三輪だったが、乞われて木屋與兵衛の番頭に座った。ここで、北前船での商売を発展させたが、主人急逝の後も主家を護った。この時、大神姓を大三輪姓と改め、生涯、大三輪朝兵衛を名乗ることになる。二十五歳の時のことだった。同時に、弟の磯夫も大神姓から葦津姓に変えた。兄弟ともに、何か心に期することがあったのだろう。ちなみに、この大三輪姓の由来だが、奈良の三輪山からとったと伝わる。

そして、主家の後継者である木屋佐太郎が成人すると、大三輪は商売の一切を遺して独立を図った。この行いは、幼少の頃、自身の家族が路頭に迷った経験からの判断だった。自分が受けた苦労を他者に負わせてはならない。そういう気持ちからだった。

しかし、この大三輪朝兵衛のこの決断は、信用を重んじる浪速商人の評価を絶対的なものにしたのだった。

余談ながら、この大三輪は土佐閥・立志社事件に関係していたといわれる。大坂での屋敷と旧土佐藩の蔵屋敷が近かったことから、大三輪の自宅に林有造、大江卓、竹内綱などが出入りした。その関係で後藤象二郎とも親

しかった。立志社事件への大三輪の関与について詳細は不明。しかしながら、大三輪の長男奈良太郎の先妻は岩村高俊（旧土佐、林有造の弟）、後妻は山内豊（とよ）盈（みつ）（土佐山内家東邸）の娘であり、土佐閥とは姻戚関係を結ぶほどに深い。

土佐閥を通じて西郷隆盛とも関係があったが、決起の資金提供の便宜を図っていたのではと考えられる。大三輪が政治を志し、大阪府会議長、大阪市会議長、衆議院議員を務めたのも、土佐の自由民権運動の影響からと考えられる。

筥崎宮の鬼門封じ

ここで、大三輪朝兵衛の故郷・筑前箱崎の話に戻りたい。

大三輪が生まれ育った筑前（現在の福岡県）だが、関ヶ原の戦い（慶長五年、一六〇〇年）以降、黒田家が統治することになった。大陸との交易で栄えた博多だったが、新しく領主として入国した黒田家は博多の西部に「福岡」という武士の町を構築した。いわば、商人の町博多に武士の町福岡が同居する形となった。

古くから都市を形成していた博多だったが、筥崎宮はその博多の町の東部に位置する。その筥崎宮は新年の「玉せせり」、秋の「放生（ほうじょう）夜（や）」という祭礼があり、多くの善男善女で賑わう。その筥崎宮（旧官幣大社）は尚武の神らしく楼門には「敵国降伏」の勅額が懸かり、拝殿は北を向いている。睨みをきかせる先には朝鮮半島がある。「敵国降伏」とは武力で威圧するものと思ってしまうが、戦いではなく徳によって従わせるという意味。有事には真っ先に他国の侵略を受け、平時には潤沢な交易の富を享受する博多の願いでもある。その昔、二度にわたって蒙古の軍勢が襲来した地でもあるからだ。

「敵国降伏」の勅額と楼門（筥崎八幡宮）

筥崎宮周辺は、その昔、白砂青松の松原だった。その筥崎宮から東北方向、鬼門の方角にわずかばかりの墓地が残っている。ここは、代々、筥崎宮宮司の墓がある場所で地蔵松原と呼ばれる。平成三（一九九一）年の都市計画によって改葬され、石のオブジェが並ぶ公園のような印象を受ける。

しかし、この墓地には徳による、日本と朝鮮との信頼関係を示すモノが残されている。

葦津家と大三輪家の墓所

墓地の中心には現在の筥崎宮大宮司の田村家の墓所がある。それを囲むように、宮司の墓石が並んでいるが、神道でありながら仏式の墓石もある。それは神仏混交時代の名残りとでもいうべきものか。

この墓地の一隅に、筥崎造りと呼ばれる特徴的な鳥居がある。その中心には葦津家奥津城（墓）があり、左手に六角形の玉垣に囲まれた葦津耕次郎の墓、右手に大三輪長兵衛の墓がある。葦津家の墓所に大三輪姓の墓を設けることで、両家が同族であることを確認するためと思える。

この地蔵松原の葦津耕次郎と大三輪朝兵衛の墓だが、その両者の墓の前に奇妙な石塔が立っている。まるで、大きな土筆のような石の塔だが、その形状、彫り込んである細工から、日本のものではないと判断できる。

これは、朝鮮王・高宗が大三輪朝兵衛慰霊のために贈った石塔だった。大三輪と朝鮮王・高宗との間に、どんな関係があるのだろうか。

大三輪長兵衛墓と高宗から贈られた石塔（地蔵松原）

朝鮮王の招聘を受ける長兵衛

ここで、再び、大三輪が大坂で独立し、北海道物産商社、第五十八国立銀行手形交換所、農商務省設置、大坂商法会議所設立に関わった頃に戻る。大坂商法会議所といえば薩摩出身の五代友厚を連想するが、これは大三輪が商法会議所設立の建白書を内務卿・大久保利通に提出した結果だった。経済人として大三輪は積極的に明治政府に働きかけている。

明治二十四（一八九一）年のある日、長兵衛の店を朝鮮代理公使の李（り）鶴（かく）圭（けい）が訪ねてきた。以前、朝鮮の商人が詐欺に遭い、難儀しているところを救った

葦津耕次郎墓（地蔵松原）

葦津家累代墓所、筥崎造りの鳥居（地蔵松原）

大三輪だったが、そのお礼を述べにきたのだった。大三輪は名前も何も名乗ってはいなかったが、大きな屋敷に住み、体格の良い男というだけで長兵衛とすぐにわかった。当時、大坂の富豪・淀屋辰五郎の邸を買い取り、身の丈は六尺余という大男といえば、大三輪を置いて他にはいない。

長兵衛が援けた朝鮮の商人は、朝鮮王・高宗（一八五二～一九一九）が抱える商人だった。悪徳商人に騙され、帰国費用にも窮していたところを、隣邦の方々の苦難を見捨ててはおれないとして援けた大三輪だった。公使は謝辞を述べに訪問したのだったが、その大三輪の人格、貨幣経済にも明るいことにいたく感心して帰国した。

今度は、朝鮮の弁理公使金（きん）嘉（か）鎮（しん）が大三輪のもとを訪ねてきた。朝鮮国王の招請状を持ち、朝鮮政府の経済顧問に就任して欲しいとの高宗の申し出だった。

明治政府は西郷隆盛の「征韓論」を退けたが、直ちに朝鮮との条約締結に向けた動きに出た。この時、朝鮮の首府を護る江華島の砲台を砲撃し、武威によって開国させた。このことは、朝鮮の日本に対する根深い反感となった。従来の朝鮮通信使という片務的な文化交流では、相互理解にまで至っていなかったこともある。

明治二十四年、大三輪長兵衛は渡韓し、朝鮮政府の経済顧問に就任した。大三輪は通貨改革、京釜鉄道敷設など、朝鮮の近代化に尽力している。大三輪に対する高宗の堅固な信頼は、この当時、何かと波風の立つ日朝関係を振りかえると極めて稀有な出来事といえる。

握りつぶされる葦津耕次郎の諫言

先述の通り、葦津耕次郎は大三輪長兵衛の甥だが、長兵衛に従い半島、大陸での事業に参画した。神道思想家として著名な葦津だが、若き日、大三輪長兵衛の薫陶を受けている。

この葦津は、朝鮮に対する日本政府の政策に諫言する人だった。人の道に外れる事々を許さず、朝鮮神宮を建立する際も朝鮮の神様が祀られていないことに強い不満を表明した。当然、朝鮮併合などは大反対だった。

大三輪長兵衛も葦津も玄洋社の頭山満とは深い付き合いがある。頭山は日本と朝鮮との対等合邦である「朝鮮合邦」には賛成したが、「併合」には反対した。昨今、合邦と併合との相違を理解せず、その言葉を混同して使用する研究者が多い。朝鮮をパートナーと見る「合邦」か、吸収合併する「併合」とでは意味が大きく異なる。

さらに、葦津は満洲域での軍部の横暴にも注意を喚起した。昭和十二（一九三七）年の日支事変勃発においては『日支事変の解決策』として、双方に反省を促す一書を著した。さらに、平和的解決を日本政府に求めた。

が、しかし、これら葦津の意見や著作はことごとく、政府に握りつぶされてしまった。

ちなみに、この葦津は玄洋社の社員名簿で確認はできないが、『玄洋社社史』緒言に記されるほど、一目置かれる存在だった。

朝鮮王高宗の石塔

大三輪長兵衛が朝鮮・高宗の経済顧問に就任したのは、朝鮮に対する慈悲深い眼差しからだった。西郷隆盛（南洲）は覇道ではなく王道をと説いた。真の文明国であるならば、文明が遅れている国に親切丁寧に手を差し伸べるはずだと。

大三輪長兵衛の行動を見ていくと、この西郷南洲の教えを彷彿とさせる。同じく、その薫陶を受けた葦津耕次郎にも同様の主張、行動がみられる。

地蔵松原の大三輪長兵衛、葦津耕次郎の墓前には朝鮮風の石塔が立っていることは述べた。風化して、はっきりとは分からないが、葦津の墓にある石塔には一対の獅子、もしくは狛犬のようにも見える彫り込みが見える。

現代史の解説では、玄洋社は朝鮮や大陸を侵略する日本政府の先兵であったと記述される。しかしながら、葦津の『日韓併合論』には、頭山が日韓〈併合〉に反対していたとの意見が記されている。頭山は満洲建国にも反対し、満洲国皇帝溥儀の招宴を辞退したほどだった。

その頭山と親しい大三輪長兵衛は隣邦の商人を援け、朝鮮国王・高宗の経済顧問として貨幣経済の改革、京釜鉄道敷設による経済発展を推進した。葦津耕次郎も、王道をもって隣邦朝鮮と接した。大三輪、葦津と肝胆相照らす仲の頭山満も同じ考えを示している。

戦後、玄洋社はＧＨＱによって解散させられ、その真実は封印された。戦前は戦前で、日本政府によって葦津等の意見は握りつぶされてしまった。

しかし、大三輪朝兵衛、葦津耕次郎という王道を実践した人物を辿ることで、真の近現代史が浮かび上がるのではないかと考える。

明治四十一（一九〇八）年一月二十九日、大三輪朝兵衛が没した際、朝鮮王・高宗は大三輪への感謝の気持ちから石塔を贈った。これは日本と朝鮮との国交を振り返っても異例のことだが、このことから、アジア主義とは王道を歩むことと理解できるのではないだろうか。

最後に、本文が大三輪朝兵衛という、近現代史に埋もれた人物の評伝に近い内容になったことをお許し願いたい。

（参考文献・資料

・中村義　他　編『近代日中関係史人名辞典』東京堂出版、二〇一〇年
・葦津泰國　著『大三輪長兵衛の生涯』葦津事務所、平成二〇年
・井上俊男　著『日本夜明けの大偉人』私家
・松尾龍之介　著『長崎を識らずして江戸を語るなかれ』二〇一一年
・浦辺登　著『フォーＮｅｔ』二〇一五年十一月号）

陸羯南のアジア認識
―『国際論』を中心として―

小野　耕資

陸羯南という人物

陸羯南（くが・かつなん　安政四年～明治四十年）は明治期に活躍した新聞記者である。陸は弘前出身で、明治二十一年に『東京電報』という新聞の主筆兼社長に就任。翌年二月十一日に『日本』と改題し、舌鋒鋭い言論活動を繰り広げた。陸は主筆として主に社説を担当し、当時は徳富蘇峰らと並び称される、福沢諭吉の次の世代を担う人物であった。陸は一級の新聞記者であったが、その政論は政府や政党の動向にとどまらず、歴史や社会、経済などと絡めて政治を見るところに特色があった。その見方は国際政治にまで及び、それが他の政論記者の追随を許さないとまで言われるほど彼の風評を高めた。

陸羯南

同時代のジャーナリストである鳥谷部春汀は陸羯南を評し、「古処士の風あり」とし彼の政治思想は中国儒教の基礎の上にドイツの国家主義を据えたものと考える。「ゆえに彼の大臣責任論はあたかも支那の諫議大夫の弾劾に彷彿たり。…彼は貴族と平民を調和せんとし、行政的知識を以て勝る」とも評されている。陸が主に活躍した明治二十年代から三十年代は、明治初期の欧化主義の風潮への反発が条約改正問題を契機に高まったころである。陸はこの時代の対外硬運動の理論的支柱となった。三宅雪嶺、志賀重昂、杉浦重剛などとともに「国粋主義」と呼ばれることがある。

『日本』

陸は、政党などの機関紙として存在する「機関新聞」でもなく、営利のみを目的とする「営業新聞」でもなく、日本にとってあるべき姿を論じる「独立新聞」を目指した。『日本』は漢文読み下し調の硬派な新聞であり、右派知的階級に読者層を持っていたと言われる。『日本』は最も対外的に強硬な論調を張ったが、また最も政府に発行禁止の憂き目にあわされた新聞でもある。二十二回、百三十一日間の発行停止は群を抜いている。陸は熱烈な愛国者であったがそれは政府との妥協を意味しなかった。陸の国民主義その他の主張は決して政府にとって都合のよいものとは限らなかった。陸は尊崇すべき皇室、守るべき国土や国民と政治指導者を明確に分けて考えており、皇室、国土、国民等は擁護したが藩閥政府の指導者は主に批判の対象であった。民権期に勃興した政党に対しても辛辣な評価が多く、彼らが国民の民意も掬わず既得権に居座っていると批判したこともあった。

陸羯南「国際論」の内容

そんな陸が明治二十六年に著したのが「国際論」である。「国際論」とは、国家同士の侵略、被侵略がどのようにして起こるかを示したものだ。陸は、日本の国家目的を欧米の侵略を止めさせることに置いた。陸の国際認識は「国際論」に言い尽くされている。陸は言論、学術状況において日本があまりに西洋に依存した状態にあり、自己の政治思想を練り上げる際にまず西洋の思想を参照するという本末転倒の事態に陥っていることを憂いている。「国際論」で重要なのは、国際競争は決して軍事力や経済力だけではなく、国民精神や国の使命を基に考えないと属国化されてしまうことと、欧米偏重の世界観を正すことこそが日本の使命だということである。

陸は世界史を力による侵略、非侵略の歴史と見做し、侵略がどのようにして行われるかを詳細に論じた。それによれば、侵略は外国に対し憧れのような感情を持たせることから始まり、次に経済的に依存させ、最後には領土を奪うのだという。陸は国を守るには軍事力と経済力だけでは駄目だという。もし輸出入の増加、人口の増加などを以て国の発展だと言うならば、欧米列強の傘下に入ってしまえば日本の繁栄は成し遂げられるだろう。だがそれではいけない。国際競争は軍事力や経済力の競争ではなく、国民精神の競争なのだ。人に使命があるように、国にも使命がある。国の盛衰は国民全員が国の使命を理解するか否かにかかっている。古今東西の歴史を鑑みれば、国の使命と言える思想がその国の元気を左右するのは議論の余地がないではないか。

「欧州以外に真文化なく、白皙人種以外に真人種なし。故に欧洲の属地にあらず、白皙人種の住所にあらざる国は彼等の視て劣等と為す所、劣等の国及人は彼等視て文明の妨害と為し、一日も其の破滅を速やかにせんと努むる所のものなり。彼等が此の理想を挾むは善し。何となれば彼等は一種の『国命』を此点に繋げばなり。然りと雖も、もし彼らの視て劣等国人となすところのもの、（中略）少なくとも長短を較して彼等に対抗し、其の『劣等』といへる無礼的称呼を甘受せざるは我れ

の義務にあらずや」。欧米列強に「劣等」と名指しされた日本やアジアはその無礼的呼称を甘受してはならないと述べた。

「さらに転じて世界文化の消長に見よ、人道の上よりすれば何人も何国もみな世界文化に賛助するの義務ありと言わざるべからず。ひとり一方の国人のみにこの義務ありて、他の国人はただ牛馬とせらるるがために存すとなさば世界の文化はつねに一様なるに止まりて進歩の運に向かうべからず。西洋の文化を存して東洋の文化を滅し、たとえ滅せざるもこれを発達せしめざるはこれ世界の文化に一要素を減ずるに均しきなり。東洋に国するもの、例えば日本国の如きは、世界文化の為にも其「国命」を重んずるの任務あり。如何にして此任務を竭さんと欲するか。欧人の文化を取るも自国の文化を棄つる勿れ。欧人と親交するも自国人を屈辱する勿れ」。東洋は自らの文化を維持し、発達させていくことこそが世界文化の進歩に貢献するのだと主張したのである。

さらに日本の「国命」は「六合を兼ね八紘を掩う」にあるとして、「王道」を世界に述べることこそ日本がなすべきことであるとした。陸は「八紘為宇」を「自ら率先して世界の公道を明らかにせんこと、これ日本帝国の錫命にして祖宗の遠猷に合するものなり」という。陸にとっての「世界の公道」とは「各国対等」であるが、優劣・国の存廃などは「国民精神」の強弱で決まる、という国際政治観であった。

更に陸の批判は「国際法」「国際例」にまで至る。「今の国際法なるものは大半みな欧の諸国を偏庇するに出づ、否、ひとり欧の諸国のみが参与して立てたるの法にすぎざるなり。欧人が国際上において自ら特権を構成し一種の族制を世界に造りたるなり。東洋に国するものは自ら甘んじて斬り捨て御免の下に立つべきか、もしくは自ら率先してこの閥族制を撤去することに努むべきか、もしくは国際法の恵を享受せんために欧化を図るべきか、三策のうち必ずその一を取らん。切り捨て御免を甘んずるはアフリカ及び南洋東洋の諸属邦を然りとす。今後の計をなすべき独立国は国際革命の首唱をなすか欧州帰化の用意をなすかの二途に外ならじ」。国際法自体が欧州の先例により欧州に有利なようにできており、解釈されている。それに不服を唱える「国際革命」の主唱者となるべきだと主張している。「国際革命」とは重い言葉である。陸は「吾輩は国際公法なるものを正理公道に基づけんことを希望するなり」と述べている。陸は国際法が欧米の侵略を合法的に正当化する様を鋭く見抜き、それを「正理公道」に基づいていないと批判し、根本的に改めることを主張した。具体的には東洋における外交上の先例も踏まえた「国際法」にすべきだと主張している。不平等条約という、西洋国際法においては合法的な手続きを踏んで行われた侵略に苦しめられた明治人だからこその切実な問題意識であった。

まとめ

陸はあくまで一人の日本人として思考し、主張した。陸は国際政治における侵略、被侵略の動向を分析したが、それはあくまで日本社会に警鐘を鳴らすためであり、傍観者として論じたものではなく、当事者として日本はどうすべきか、世界はどうあるべきかということが念頭にあったうえで説かれたものであった。本論では割愛してしまったが、陸は軍事的、経済的側面に限らず様々な側面においても侵略、被侵略の関係を検討している。

それはコレラなど病気の流入から移民の問題、国際的な婚姻関係にまで及んだ。陸は当事者が侵略を意図していなかろうとも侵略的行為は発生するものであり、それに備える必要性を説いた。陸は「国政の本義は他なし。内においては国の統一、外に対しては国の特立、かくのごときのみ」という。内政においては国民が一致団結し、外交においては自立した外交姿勢を目指した。それを実現するために、日本人は自らの使命を自覚し国際政治に臨むべきであると考えていたのである。

大アジア主義の総説と今日的意義

折本龍則

大アジア主義とは何か

大アジア主義とは何か。この問いに答えるのはそう簡単ではない。一般的に大アジア主義は、西欧列強によるアジア侵略の脅威に対抗するために、我が国を中心としたアジア諸国の連帯を説く思想と運動として説明されるが、これはあくまで政治的・文化的次元での定義であって、より根源的には、個人主義や物質主義を根底とする近代文明を、アジアの伝統的な共同体主義や精神主義を再興することによって超克しようとする思想や運動として、道義的・文明的次元において定義される。後者における、「近代の超克」としての大アジア主義とその現代的意義については、本紙「創刊の辞」に言明した通りであるが、本稿では、まず前者の政治的・文化的次元における大アジア主義とその今日的意義について考察してみたい。

周知のように、明治以降の我が国は、富国強兵や殖産興業のスローガンを掲げて国家の近代化路線を邁進し、そのために西欧列強から先進的な技術や制度を輸入した。それは、明治草創期の我が国政府が、西欧列強から不平等条約を課された半独立の国家であり、いちはやく国家の近代化を成し遂げることによって、真に独立した国家としての地位

を獲得する政治的必要に迫られていたからに他ならないが、急速な国家の近代化は、一方では近代化の名を借りた西欧化への偏重をきたし、それはなかんずく井上馨外務卿による鹿鳴館外交のように、列強への露骨なすり寄りと追従政策になって表れたのである。こうしたなかで、旧士族を中心とする国民の一部は政府への不満を募らせたが、征韓論争を発端とする明治六年の政変で西郷一派が下野すると、反政府運動は燎原の火の如く在野に燃え広がった。これに対して政府は新聞紙条例や讒謗律などを公布して反対党を厳しく弾圧し、ついに明治十年西南戦争の勃発をもって不平士族による反政府運動はその極点に達したのである。

大アジア主義の淵源

西郷は政府の欧化政策に対して、ご皇室を戴く我が国の国粋護持を以ってし、また西欧列強の覇道を戒めてアジアの道義を唱導した。それは『西郷南洲翁遺訓』に「廣く各國の制度を採り開明に進まんとならば、先づ我國の本體を居ゑ風教を張り、然して後徐かに彼の長所を斟酌するものぞ。否らずして猥りに彼れに倣ひなば、國體は衰頽し、風教は萎靡して匡救す可からず、終に彼の制を受くるに至らんとす。」とあり、また「文明とは道の普く行はるゝを贊稱せる言にして、宮室の壯嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふには非ず。世人の唱ふる所、何が野蠻やら些とも分らぬぞ。予嘗て或人と議論せしこと有り、西洋は野蠻ぢやと云ひしかば、否な文明ぞと爭ふ。否な野蠻ぢやと疊みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せしゆゑ、實に文明ならば、未開の國に對しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開矇昧の國に對する程むごく殘忍の事を致し己れを利するは野蠻ぢやと申せしかば、其人口を噤めて言無かりきとて笑はれける。」あるのでも明らかである。

このように西郷は、欧化に対する国粋、覇道に対する王道の精神を体現する存在であっ

西郷南洲

城山の自決で西郷の肉体は滅んだが、その高貴な道義精神は、彼の精神的子孫によって継承された。その一人である頭山満は、大アジア主義の巨頭として知られるが、彼が率いた福岡の玄洋社は興亜の志望に燃えた多くの人士を朝野に輩出し、なかでも頭山と同志の来島恒喜は、外国人の内地雑居や外国人判事の登用といった屈辱的な条約改正案を進めていた外務卿の大隈重信に爆裂弾を投擲し、文字通り大隈を「失脚」に追いやった。頭山は来島の葬儀で「天下の諤々は君が一撃に如かず」と弔辞を述べ、この事件によって玄洋社の名は天下に轟渡ったのである。また玄洋社における少壮有為の若者たちは、アジア復興を夢見て大陸に雄飛し、ときには乞食同然の姿でつぶさに辛酸を舐めながらも、アジアの各地を踏査して風俗や人情などの情報収集に努めた。こうした大陸浪人と呼ばれる志士たちの領袖となったのが頭山であり、彼は、明治政府による欧化偏重を排して国体の守護者を任じると共に、金玉均やアギナルド、孫文といったアジア独立の志士たちを献身的に支援することによって、アジアに王道を敷くべしとする南洲翁の精神を継承しようとしたのである。

頭山満

民権と国権

戦後、玄洋社は、我が国によるアジア侵略のお先棒を担いだ国権団体の権化とされ、頭山も、大アジア主義者というよりは、「右翼の親玉」や、「政界の黒幕」と云ったダークなイメージが植え付けられたが、明治十四年に創立された玄洋社は、そもそも自由民権団体として出発したことが重要である。それが後年、国権団体としてイメージされるまでにはどのような変転があったのだろうか。たしかに、『玄洋社社史』には、日清戦争前夜の明治十九年に、丁徐昌提督率いる清国北洋艦隊の水兵が、寄港した長崎で乱暴狼藉を働いたにもかかわらず悠々錨を抜いて立ち去った国辱事件を契機として、玄洋社がそれまでの民権主義を捨てて、国権主義に転向したことが記されている。しかし、玄洋社はそれより以前の明治十五年に創立された当初から、憲則の第一条に「皇室を敬戴すべし」、第二条に「本国を愛重すべし」第三条に「人民の権利を固守すべし」とする三則を掲げており、第二条の「本国を愛重すべし」の「本国」はとりもなおさず、我が国の領土や人民、政府からなる主権、つまり国権を意味しているのであるから、国権主義は明治十四年に突然出て来た訳ではなく、第三条にある「人民の権利」としての民権と矛盾なく両立並存する主張であった。

もっとも、民権と国権という一見矛盾する概念を併せ持つ彼らの主張は、明治初期の我が国にある程度共通した見方であったようだ。頭山統一氏（頭山満の孫）は、『筑前玄洋社』のなかで、幕末・明治を通じて我が国民の共通意識であったのは、「尊王・攘夷・公議公論の三位一体をなす論理であった」と述べている。まず「尊王」については、幕末に佐幕か討幕かの争いがあり、明治になって

も政府・吏党と在野・民党の争いがあったが、両者を通じて尊皇という一点にはいささかの相違もなかった。そして「攘夷」は、明治国家における国権の伸長となり、「公議公論」は民権の伸長となって現れた。その上で、この民権の伸長としての「公議公論」は、君民一体の我が国において、「尊皇」、すなわち皇権の恢復と軌を一にし、それは「徳川」と「列強」という内外の「夷狄を攘う」、すなわち「攘夷」を断行することによって成し遂げられた。『自由党史』にいわく、「維新の改革は実に公義輿論の力を以て皇室の大権を克復し、国民の自由を挽回し、内に在ては以て一君の下、四民平等の義を明らかにし、挙国統一の基礎を定むると倶に、外に向っては波濤開拓の策を決し、万邦対峙の規模を確立したることを。誠に是れ中興国是の帰着する所にして、是に於てか武門特権の階級的天地を破壊せる後ち、直ちに建設の方向に全力を投ずべき時機に達せり。」と。このように、当時の国民精神において、皇権の恢復は民権の伸長と同義であり、国権は、こうした君民和協の妨げを払い除けるための権力として認識されていた。

玄洋社の民権論もまた、あくまで尊皇を基軸に据えたものであり、現行憲法が依拠する西欧起源のデモクラシーの思想とは全く似て非なるものである。それは玄洋社の前身で、箱田六輔を社長、頭山満を監事に配した向陽社の民権思想に関する以下の記述（上掲した頭山氏の著作）からも明らかである。いわく「向陽社の普選思想は、まったく日本的な君民一体の国体観の常識から出たものだった。無私にして、民の幸福を皇祖に祈られることをみずからの務めと信じられる祭祀権者天皇は、人民を「おおみたから（公民）」として、その権利を保証して、慈しまれる。権利を保証せられた人民（臣民）は、天皇に捧げる忠誠心において万民貴賤のへだてなく平等である。大臣も乞食も、天皇に対して完全に平等に忠誠を尽くそうとする、誇らしき義務意識を有する。この日本的「臣民の権利義務」は、西欧における君主あるいは国家が、人民に対し、その安全を保証するサーヴィスを提供し、人民はそのサーヴィスに相応する代価を、君主、国家に支払うという対立的契約観念が源流となる「権利・義務」概念とまったく異なるものであることは明瞭である」。

玄洋社が民権団体の看板を捨てて国権主義に転向した契機としてよく指摘されるのが、明治二十四年の第二回総選挙に際して、頭山がときの松方正義内閣、なかでも内相の品川弥二郎と結託し、政府による選挙干渉、民権派の弾圧に加担した一件である。この一件を以って民権派たる頭山の変節と見なす意見もあるが、事の事情をよくよく調べてみると、主義を転向し節を変じたのは玄洋社や頭山ではなく、むしろ彼や彼らを取り巻く、政府であり民党の方であることが判る。というのも、政府の方では、「万機公論に決すべし」とする五箇条誓文を奉じながら、もっぱらの現実は薩長藩閥が大政を壟断し、明治十五年の集会条例改正、明治十六年の新聞紙条例改正、出版条例改正と続く一連の言論弾圧政策によって民党を圧迫する一方で、不平等条約の改正交渉に於いては西欧列強に対して屈辱的な譲歩を繰り返し、国民の怒りを買っていた。

しかし一方の民党の方はどうかというと、それまで条約改正（国権）と国会開設（民権）を不可分のテーマとしてきた板垣退助率いる愛国社の運動が、政府の懐柔によって条約改正の要求を引っ込め、国会開設期成同盟への改組の後は、その運動目標を国会開設に限定したように、国権の主張を放棄して民権の主張に偏向し出したのである。愛国社は板垣退助率いる土佐の立志社が中心になって結成された民権派の全国組織であり、大久保暗殺後の明治十一年に開かれた愛国者再興集会には、福岡を代表して後に玄洋社社長を務める進藤喜平太と頭山満が参加している。その後、福岡と愛国社の繋ぎ役は、共愛会を代表して箱田六輔が担い、彼は板垣をして「箱田あれば西南方面は安心なり」とまで評さしめたが、頭山は、次第に上述した民党の変節と堕落に幻滅し、むしろ一部では「国権党」と揶揄されていた熊本紫溟会の佐々友房等に接近した。この結果、頭山は箱田一派と疎隔を来たし、玄洋社内での孤立を深めていった。「一人でいても寂しくない男になれ」とは、そのときの彼が発した言葉とされている。

このように、民権と国権を国家の発展にとって不即不離の双翼と考えていた頭山にとって、政府が国権に揺れ動き、また民党が民権に揺れ動きするのは、ともに容認しがたい変節であり、だからこそ頭山は「舟が右に傾けば自分は左に寄り、左に傾けば、自分は右による」というのを生涯のスタンスとし、ときには孤立をも顧みず、日本という船が覆らぬようにバランスを取るのを自己の使命と任じていたのである。このバランス感覚が判らなければ、晩年の頭山が大東亜戦争には諸手を挙げて賛成しつつも、東條の翼賛体制には反対し、中野正剛をして『戦時宰相論』を書かしめた所以も判らない。

しかし頭山の乗る舟の船首は常に「尊皇」という不動の方向を向いていたのであり、それだけは絶対の信念として微動だにしなかった。頭山は、高場乱の下で浅見絅齋（山崎闇齋の高弟）の『靖献遺言』を愛読して忠勇義胆を錬り、また同郷の平野國臣に洗礼を受けた筋金入りの尊皇家だ。それは次のような頭山の発言からも覗える。「我が日本の天子様は宇宙第一の尊い生神であらせられる。そして一切の万物悉く天子様の御物でないものはない。わけても、その最も大切な御宝は、吾々一億の日本臣民である。この天子様の大みたからである吾々臣民の生命は、自分の生命であって而も自分のものではない。天子様の御為に死すること、それは臣民として大慶此上もないことである。」（藤本尚則編『頭山精神』）

皇道の恢弘

かように尊皇絶対の頭山にとって、彼の抱いた興亜思想は、内に対する民権の伸長と同じく、アジアに対する皇道の恢弘に他ならなかった。それは、同じアジア主義者で頭山と交流のあった宮崎滔天が夢想した天賦人権のユートピアとは明瞭に一線を画する理想であった。民権一家の宮崎家のなかで、滔天が最も感化を受けた六男の弥蔵は、『三十三年の夢』のなかで次のように、アジア復興の志望を述べている。

「おもえらく、世界の現状は弱肉強食の一修羅場、強者暴威を逞しゅうすることいよいよ甚だしくして、弱者の権利自由、日に月に蹂躙窘蹙せらる。これ豈軽々看過すべきの現象ならんや。いやしくも人権を重んじ自由を尊ぶものは、すべからくこれが回復の策なかるべからず。今にして防拒するところなくんば、恐らくは黄人まさに長く白人の圧抑するところとならんとす。しかしてこれが運命の岐路は、かかって支那の興亡盛衰いかんにあり。支那や衰えたりといえども、地広く人多し。能く弊政を一掃し統一駕御してこれを善用すれば、以って黄人の権利を回復するを得るのみならず、また以って宇内に号令して道を万邦に布くに足る。要は、この大任に堪ゆる英雄の士の蹶起して立つ有るに在るのみ。われ是を以ってみずから支那に入るの意を決し、あまねく英雄を物色してこれを説き、もしその人を得ば犬馬の労を執ってこれを助け、得ざればみずから立ってこれに任ぜんと欲す。」ここにあるのは、いかにも滔天らしい、純朴で牧歌的な人種平等のロマンチシズムである。

宮崎滔天

これに対して、頭山が「大西郷以後の人傑」、「五百年に一度の英雄」と讃えた大アジア主義者の荒尾精は、『宇内統一論』のなかで、「天成自然の真君」たる天皇を戴く我が国の天命は、「六合四海を一統して、普天率土の生民をして、洽く我皇の仁風を仰がしむること」、つまりはアジアに皇道を恢弘することであると説いた上で、「苟も我が国をして綱紀内に張り威信外に加わり、宇内万邦をして永く皇祖皇宗の慤徳を瞻仰せしめんと欲せば、まずこの貧弱なるものを救い、この老朽なるものを扶け、三国鼎峙し、輔車相倚り、進んで東亜の衰運を挽回して、その声勢を恢弘し、西欧の虎狼を膺懲して、その覬覦を杜絶するより急なるはなし」と述べ、皇道に拠る日清韓三国の提携を説いている。

荒尾は明治十八年、陸軍参謀本部付の将校としてシナに渡り、その後、岸田吟香が上海で売薬業を営んでいた楽善堂の支店を漢口に開くことで、商家に扮して諜報活動に従事した。この漢口楽善堂は、玄洋社員を始めとする興亜志士たちの梁山泊となり、シナ浪人の宗方小太郎や石川伍一など多くの人士が出入りした。また荒尾はシナ各地の実情を調査した結果、日支提携の必要性を痛感し、その為に、両国の貿易振興を目的とした日清貿易研究所、後の東亜同文書院を創立した。この研究所からは、清国改造を志し、明治初期の我が国民としていち早く新疆の偵察に赴いた浦敬一（詳細は拙稿、「清国改造を志し、新疆偵察の途上で消息を絶った東亜の先覚烈士、浦敬一」参照）や、日清開戦に際し軍命を帯び遼東半島の敵情視察に赴いた結果、刑場の露と消えた「三崎」こと殉節三烈士（詳細は拙稿、「生を捨てて義を取る―「三崎」こと「殉節三烈士のこと」参照）など、シナ大陸の言語や情勢に精通し、戦時は通訳官や情報将校として活躍した多くの志士たちを輩出している。荒尾は早くも陸軍士官学校の時代から、頭山と同じく『靖献遺言』を愛読して忠義を養い、学内では「靖献派」の領袖として畏敬されていた。しかも彼は上述したように、皇道恢弘としての大アジア主義を抱きながら、同時にその理想を具体化する事業家としての経綸も兼ね備えていたのであり、彼が説いた日清韓三国の提携は、「祖国を熱愛するが故に支那朝鮮を誘導扶助して、東洋を護る障壁たらしめんと」（『東亜先覚志士記伝』）する大アジア主義の戦略的な実践家である荒尾と、アジア復興のロマンチシズムに耽る滔天には同じアジア主義者でも聊かの疎隔があるのであって、それは滔天が前出した『三十三年の夢』のなかで、荒尾一派を目して「支那占領主義者の一団なりとなし、異主義の集団なり」として毛嫌いしていた事実とも無縁ではない。

荒尾精

怜悧な情勢認識

こうした荒尾と滔天の疎隔は、後に犬養毅や頭山等の民間志士が、アギナルド率いるフィリピンの独立党に武器を援助しようとして失敗した、いわゆる「布引丸事件」の際にも現れた。当初、滔天が香港で出会ったアギナルド側近のポンセを犬養に紹介したのは、フィリピン独立を想う一片の義侠心によるものであったが、かたや犬養の依頼を受けた玄洋社の頭山満や平岡浩太郎、その甥の内田良平などが、この独立運動を援助した背景には「それより前に内田良平氏がシベリア鉄道の

エキの状況を視察かたがたシベリアの冒険旅行を企て、遂に露都に入った際、セントペテロブルクの日本公使館には八代六郎、廣瀬武夫などという海軍将校中の錚々たる逸材が駐在武官として滞在していて、共に国事を談じ合った末、日本は一面に露国の東方経略の鋭鋒を挫き、朝鮮、満州、蒙古、東部シベリアに強固なる地歩を占めると共に、一面にはマレー半島からフィリピン群島に我が海軍根拠地を得、これを国防の第一線としなければ、太平洋の制海権を握り、帝国永久の安危は期せられぬというに一致し、内田氏の帰朝後、福岡玄洋社の頭山、平岡等も此の説には非常に共鳴していた」（『犬養木堂伝』、原書房）というような深謀遠慮があったという。

内田良平

また他にも、尊皇家の頭山が、同じ日本への亡命客でも、保皇派の康有為ではなくて共和派の孫文を支援した背景には、孫文が満州の我が国への割譲を頭山に約したことが一因を成したともいわれている。このように、大アジア主義の思想と運動は、単にアジアの独立を夢見る豪傑たちの武勇伝に止まるものではなく、その根底には、冷厳な国際情勢の認識に裏付けられた深謀遠慮があった点が重要である。（もっとも、以上で筆者は、あえて荒尾と滔天の差異をクローズアップすることで、大アジア主義の真相を明らかにしようとしたが、滔天が荒尾を「支那占領主義者」と呼んだのは単純な誤解によるという意見もあり、また彼が二兄の弥蔵と同じく影響を受けた長兄の八郎は、十二歳から月田蒙齋に師事して崎門学を学んでいることなどから、彼の思想を単純にキリスト教やルソー直訳流の民権論の影響によるものと決めつけるのは早計かもしれない。）

このように、玄洋社の興亜思想は、皇道恢弘を目的とした対アジア外交の理念でありながら、同時に冷厳な国際情勢認識に裏付けられた経綸をも兼ね備えていた。それはとりもなおさず、いかに崇高な理想も、それを実現しうるのは、国家の強大な権力のみであるという彼らの醒めた認識によるものであろうが、しかしその国権もまた、前述したように、彼らにとっては皇権と一体化した民権を内外に於いて伸長するための一手段に過ぎないのである。この微妙な民権、国権、尊皇の均衡点に立脚するからこそ、内田良平は、「日韓併合」を推進する伊藤統監に仕え、権力の側に立ちながら、一方では「日韓合邦」を主唱して、その武断統治を戒めたのである。

以上、政治的・文化的側面よりみた大アジア主義について概説したが、その要点を以下のようなものであった。

第一に、大アジア主義は明治政府の欧化路線ないしは西欧列強に追従したアジアへの覇道外交に対抗し、西郷南洲を精神的淵源として、天皇を戴く国体の護持、王道外交を唱導するものである。

第二に、西郷精神の継承者である頭山満や彼が率いた玄洋社にとって、尊皇、民権と国権は、三位一体の概念である。しかるに政府は国権に偏して恩賜の民権を弾圧し、一方の民党は浮薄な民権論に堕して国家の根基を危うからしめた。そこで頭山は、舟のたとえにあるごとく、時に応じて立ち位置を右に変え左に変えしたが、尊皇という一点に於いて不変であった。

第三に、我が国の対アジア王道外交は、皇道の恢弘に他ならず、西欧的なヒューマニズムや万国平等の原則とは一線を画する固有の普遍主義を内包していた。しかし、荒尾精や頭山、平岡、内田といった玄洋社の抱いた興亜思想は、ただ皇道の恢弘を鼓吹するだけではなく、我が国内外の冷厳な情勢認識に基づいた現実的利害とも合致していた。

今日的意義

かくのごとく要約される大アジア主義の今日的意義は何か。

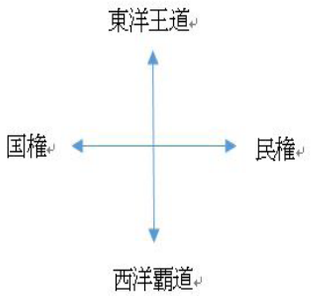
第一の点に関して、明治政府が列強から不平等条約を押し付けられていたのと同様に、戦後の我が国も、アメリカによる不平等な安保条約・地位協定を課された半独立国であり、「日米同盟」の名の下に盲目的対米追従を続けてきたが、米ソ冷戦以後はその傾向に拍車がかかった。内政では、我が国を仮想敵国とする米国の外圧に屈し、新自由主義的な構造改革を強行し、外交的にはアメリカのアジア侵略に加担して、国際テロリズムの標的にされている。こうした一連の対米従属強化策が、長州の申し子ともいうべき安倍晋三首相に推し進められているのはいかにも歴史の皮肉である。

また第二の点に関して、我が国の政府も政党も、国民主権の名の下にご皇室を蔑ろにし、「民のかまど」を思召す一視同仁の大御心は国民に届いていない。戦後の占領遺制のなかで、尊皇の大義は捨て置かれ、軍事力を含む我が国の主権は制約された。その一方で、政府はテロ対策や治安維持を名目とした言論の統制を強化し、一連の新自由主義的な構造改革を推し進めることによって、国民における貧富貴賤の格差を助長し、我が国に社会的文化的断絶を引き起こしているのである。このように、本来我が国では三位一体を成すはずの皇権（尊皇）・民権・国権は、戦後体制の呪縛の中で却って三権分立の如き相反に陥っている。

そして最後に第三の点に関して、戦後の自民党政府が固守してきた「日米同盟」の名による対米従属は、アメリカの覇権が衰退し、

中国の軍事的台頭と覇権主義的侵略行為を充分に抑止しえなくなりつつある今、最早戦略的にも合理的とは言い難く、むしろアジアにおける強力な第三国との連携によるリバランスが必要である。こうした地政学的基礎の上において、我が国は対アジア王道外交の理念を掲げ、西欧的なパワー・ポリティークスを超えるアジア王道秩序の建設を目指すべきである。無論、我が国がアジアに王道を唱える以前に、一個の国家として自主独立の気概を持たねばならないのはいうまでもないが、同時に大アジア主義は、荒尾精の処でも見たように、アジア友邦との提携を梃子として、我が国の独立を画策する構想でもある。したがって国体顕現としての維新と皇道恢弘としての興亜は車軸の両輪たるべく、相倚り相俟つ関係に立たねばならない。

次回では、大アジア主義の道義的・文明的側面に眼を転じて論じてみたい。（続く）



インド哲学とシャンカラ
―その現代的意義―①

金川　雄一

「東洋と西洋、「人類の魂の道場」たるアジアと、「人類の知識を鍛える学堂」たるヨーロッパは、世界史における最大至高の対抗個体として今日に至り、相離れて存続し難き処にまで進み尽くした。」（大川周明「亜細亜・欧羅巴・日本」）

人類の魂の道場

「人類の学堂」たる西洋は、希臘以来のロゴスの伝統、近代的自我の確立による合理主義精神に基づく科学技術文明、資本主義、近代政治社会を生み出した。それらに通底するのは自我の確立による個人主義である。すなわち科学は自我に内在せる理性と対象の一致を求める精神を求め、資本主義は個人の経済的利潤の最大化を求め、近代的政治社会は個人の権利の拡充とその連関総和としての民主主義を求めたのである。

これらの原理は欧州の枠を超えて普遍化し、人類文明を今日まで牽引してきたことは事実である。しかしながら現代に於いてはそれらが急速に行き詰りつつある。科学文明は原発事故、環境破壊等をもたらし、資本主義は人心の荒廃と格差を生み出し、民主主義は人気取りの衆愚政治となりつつある。

それらの病状を超克するための手掛かりは何処にあるのだろうか？　我々はその道しるべを「人類の魂の道場」たるアジアの中に求めなくてはならない。仏教、儒教そして神道…。すぐれた思想はアジアに山とあるが、小論ではその一例としてギリシャと並び称される哲人の国インドの哲学の流れ、その中でもとりわけシャンカラの哲学を取り上げたい。

本論文の構成は以下のとおりである。

第一章ではインド哲学の前史としてアーリア人種のインド流入とともに花開いたヴェーダとその神々の世界について取り上げる。

第二章ではヴェーダ以来の祭祀主義へのアンチデーゼとして誕生したウパニシャッド哲学の展開、とりわけシャンカラの哲学について記し、ヴェーダ時代から強固に存在した唯一なるものへの憧憬がブラフマンに結実し、さらにそれが個人（アートマン）と一体のものであると認識する神秘的境地「梵我一如」の中に単なる個人主義も現実社会も超越した没我の境地を見出す。

第三章の結論ではウパニシャッド的没我の境地の今日的意義を考察し、利己主義が蔓延した生きづらい現代社会における精神生活のあり方について考えていきたい。

第一章　アーリア人流入とヴェーダ、バラモン

アーリア人とヴェーダ

インドアーリア人の起源は一説にはカスピ海北、コーカサス山脈付近であると言われている。彼らは何らかの理由で故地を離れ東西に大移動した。西へ向かった人々は西洋人の起源となり、東に向かった人々はメソポタミア・シリア・パレスチナをへて西トルキスタンの草原地帯にしばし定住した。その後再度移動し、途中西南のイランに定住した一派と別れ、ヒンズークシ山脈を越えてインドに侵入した。これらの人々がインドアーリア人の祖先だと言われている。インドアーリア人は現地のドラヴィダ人などを征服し紀元前十三世紀末ごろ、ついにこれを隷従せしめインドに定住することとなる。それからおそらく紀元前一〇〇〇年ごろまでに信仰が確立した聖典こそが「ヴェーダ」である。ヴェーダの語源は「知る」であり、古の聖賢リシが霊感を通じて開いたものとされ、シュルテイ「天啓聖典」とも言われ、バラモンによって口伝で継承されていった。ヴェーダには四種類ある。

一つ目は「リグヴェーダ」である。神々への賛歌を集めたヴェーダで、二巻～七巻は編集方式が共通しており、後に加えられたとみられる。一巻、八巻、十巻および酒神ソーマについての賛歌のみを集めた九巻の全十巻からなる。一〇一七の賛歌とヴァーラキリアという補遺歌一つからなり、アーリア人の古代の生活様式を伝える根本史料と言える。

二つ目は「サーマ・ヴェーダ」である。祭祀における詠唱のについて書かれたヴェーダであり、歌詞と旋律（サーマン）が収録され

ている。歌詞のみ収集したアールチカ三種、詠唱の方法を収録したガーナを四種収録している。サーマンには呪術的な力があるとされるが、収録される歌詞の内容はリグヴェーダと共通のものが多く、文学的哲学的価値に乏しい。しかし古代インドの音楽について研究する上では重要な史料となる。

三つ目は「ヤジュルヴェーダ」である。祭祀の準備から終結に至るまでの作法、供物、マントラなどについて記されたものである。編纂方式の違いから白ヤジュルヴェーダと黒ヤジュルヴェーダに分裂している。

四つ目が「アタルヴァヴェーダ」である。このヴェーダは呪法について記している。アタルヴァヴェーダは九派によって伝えられたが、現在に伝わるのはシャウナカ派とパイッパラーダ派のものであり、前者が一般に流布している。吉祥増益、呪詛調服の短い呪文を収録し、リグヴェーダには見られない民間信仰を反映した一～七巻、長い呪文を収録し中にはウパニシャッドへと連なってゆく哲学賛歌も収録した八～十二巻、太陽にささげる十三巻、結婚式についての十四巻、葬式についての十八巻等の主題によって統一されている巻、付録の十九巻、リグヴェーダから借用した最も新しい二十巻まである。

なお、ヴェーダ文献はサンスクリット語で書かれているが、この語は時代によって相違のある部分も多いので、ヴェーダ文献に用いられる語を特にヴェーダ語という。

それぞれのヴェーダには四種の文献群がある。

一つ目が「本集（サンヒター）」である。ヴェーダの中核・賛歌・歌詠・祭詞・呪詞が収められる。狭義にはこの本集のみがヴェーダと言われる。

二つ目が『ブラーフマナ（祭儀書）』である。祭祀の執行規定やその神学的説明について記されている。

三つ目が「アーラニヤカ（森林書）」である。森の中で伝授される秘儀を記している。

四つ目が「ウパニシャッド」である。宇宙の根本原理や個体の本質に関する哲学的思索が記されている。

これら四ヴェーダと四種の文献群に基づき祭祀と呪法が行われるが、インド哲学者辻直四郎は『インド文明の曙』で、「インドにおいては、祭祀と呪法の間に本質的区別がない。荘厳な祭式と恋の勝利を期する呪法との間には非常な相違があるように見えるが、ともにマントラ（賛歌、呪文等）の神秘力（ブラフマン）の一定の行作の効果によって、必然的に願望の成就をもたらす点においては根本的な差別は存在しない、リグヴェーダの中にもアタルヴァヴェーダ的な若干の賛歌がおさめられ、ヤジュルヴェーダの規定する一群のカーミア・インシュティ（願望祭）は目的手段に於いてアタルヴァヴェーダの呪文と何ら選ぶものはない」と総括している。

ヴェーダの神々

「ヴェーダ」には多彩な神々が登場する。ヴェーダに登場する神々は三類型ある。

一つ目は自然現象を神格化したものである。祭祀で重要視される護摩の炎をつかさどる火の神アグニ、暴風の神ルドラ、陽炎の神ウィシャス、風の神ヴァーユ（インドのみならず東南アジアでも信仰される猿神ハヌマーンの父とされる。ちなみにハヌマーンは西遊記の孫悟空のモデルである）等がある。

二つ目は、理想の戦士像とされアーリア人を保護する戦士の神インドラ、天界の掟をつかさどり違反者に天罰を加える司法の神（後水の神）ヴァルナ等自然との関連が不明確なものである。

三つ目は契約の神ミトラ、信念の神シュラッダー等抽象的な観念を神格化したものである。

J・ゴンダは『インド思想史』で、「インド人は、人間の知覚や理解を超えたあらゆるものに勢力を感じ、自分たちの自由を妨げ、活動を阻止できる力を認め、これに対して恐れを抱いた。（中略）「ここに勢力が発言す」との体験に基づいて勢力に呼び名が与えられ、しかもそれが実在とみなされた」、「人は神的なものを、自然界にも、人間の本性中にも感じ、経験し、体験する、ここで自然と超自然は何ら対立しないし分離されない。（中略）神的なものを税櫃を超えた勢力、聖なるものと考えていた」と評している。

ヴェーダの神々における賛歌の多さはインドラ、アグニ、ソーマという順番である。以下それら三神の概略を述べる。

まず「インドラ」は、ヴェーダの神々の中で最も鮮明に擬人化された英雄神であり、その起源は遠くメソポタミアに淵源する。紀元前十四世紀にヒッタイト王スピリウルマとミタニ王マティワザが交わした契約の書簡には、多くの神々と並んでその名が見られ、アーリア人の血が小アジアにも根付いたことを示している。体も髪も髭も茶褐色で巨大な体躯を持ち、暴風神マルトの群れを従え、象や天翔る馬車に乗ってアーリア人の敵を殲滅する理想の戦士である。かの神の最も大きな功績は神酒ソーマを痛飲し、その武器ヴァジュラを持って悪竜ヴリトラを撃破し水と光明を人間界にもたらしたことである。暴飲暴食粗野で時に天界の平和を乱す行為もするが、信者には多くの恩恵を与えるとされている。

次に「アグニ」は、祭祀でも重要な火を神格化した神である。語源はラテン語の ignis と同じとし（辻前掲書）、インドにおいて「アグニ」、イランに於いては「アタール」として崇拝された。火のあるところに現れ黄金の顎と歯をもち、火を頭髪とし七個の舌を持って火の中に投じられた供物を味わう。そして供物を天界の神々へ運び神々を地上に運ぶ、神と人間の仲介者にして祭官の原型である。人間の最も切な関心ごとたる祭祀に関連

する神であるため特別の親近感を持たれ、家庭の神として家庭とその子孫に恩恵を施す一方、悪人は絶滅し焚殺する。なお妻の名をスヴァーハといい密教真言で用いられる蘇婆訶の語源ともなっている。

最後に「ソーマ」である。語源は「搾る」であり、ゾロアスター教のアヴェスタ聖典のハオマに相当する神々の飲料である。またその神格化された姿は祭祀に用いられ最も重要な供物である。ソーマは山地に生える灌木の一種で、その幹から芳香のある黄褐色の液体が取れ、それを濾過したものが神々にささげられた。実際には何の木であったかよくわかっていないが、伝説では天界に起源をもち霊長により地上にもたらされたとされる。「マドゥ」、「アムリタ」とも呼ばれ人間に活力を与え、子孫繁栄、万病治癒の効果があり、詩人の詩想を豊かにするという。

神の種族として「デーヴァ」と「アスラ」があり多くの場合前者が善神、後者が悪神となっている。先程「アーリア人の一派がイランに定住した」と書いたが、イランに定住したアーリア人が信仰したゾロアスター教の聖典アヴェスタではこのデーヴァとアスラの関係は転倒し、アスラが善神、デーヴァが悪神となる。これらの神々には仏教に取り入れられ、日本においても信仰されている神も多い。例えばインドラは帝釈天、ヴァルナは水天宮の水天もしくは雷神、ヴァーユは風神（風天）、アグニは火天、ウィシャスは摩利支天といったようにである。なお密教で信仰される十二天はみなヴェーダの神々が起源である。京都東寺の十二天などが有名である。ヴェーダには多くの賛歌があるが、その中で最も崇拝されるインドラの賛歌を引用する。

1．思慮ある第一の神は、生まれるや否や、その力で［他の］神々に打ち克った。／彼の武勇が偉大なので、天地も彼の怪力を恐れた。――人々よ、彼こそインドラである。

2．彼は震えていた大地を固めた。彼は動揺していた山々を静止させた。／彼は空界を測量してさらに広からしめた。彼は天を支えた。

3．彼は大蛇（アヒ）を殺して七つ河流を解き放ち、ヴァラ（悪魔の名）の囲いから牛どもを駆り出し、／二つの石の間に火を生じ、戦闘における勝者。

4．彼はこの一切を動揺するものとして創りなした。彼はダーサ族を低きものとして征服し消失させた。／賭博者が賭けた品物を得るように、彼は勝利者として敵の所有物を獲得した。

5．恐ろしき彼（インドラ）について人々は問う、「彼はどこにいるのか？」。また彼について人々は言う、／「彼は存在しない」と。彼は、賭けた品物を減らすように、敵の所有物を減少させる。彼を信ぜよ。――人々よ、彼こそインドラである。

（中村元『ヴェーダの思想』）

さらに神々への賛歌だけでなく世界の平和、インド文明の理想を願う賛歌が散見されるのも興味深い。例えば「和合の歌」では、

あなた方は集合せよ。ともに話し合え。あなた方の心は、協和せよ。
昔の神々が協和して、祭祀の供物を享受するために座っていたように。
智慧のはからいは共同であれ。会合は共同であれ。心は共同であれ。
それらの人々の思考はともにあれ。
協和せる智慧のはからいを、わたしはあなた方に勧める。
共通なる献供をもって、わたしはあなた方に勧める。
共通なる献供をもって、わたしはあなた方に捧げる。
あなた方の目的は共同であれ。あなた方の心は共同であれ。
あなた方の思いは共同であれ。あなた方が幸せにともに生きるように。

（中村元『ヴェーダの思想』）

と歌われているのである。

カーストとバラモン

よく知られているように、インドの社会はカースト制度のもとにある。「カースト」はポルトガル語で、現地では「ヴァルナ（色）」と言う。そしてヴァルナの神話的起源はヴェーダに見ゆる原人プルシャの神話である。プルシャは千の頭、手足を持つ巨人であり、神々の祭祀の生贄とされ、切り刻まれたときその口からバラモン（僧侶）が、両腕からクシャトリヤ（王族）が、両腿からバイシャ（庶民）が、両足からシュードラ（奴隷）が、胃から月が、眼から太陽が、へそから空界が、頭から天界が、両脚から地界が生まれた。巨人の死体から万物が生成するという神話はシナの盤古神話とも共通している。

さて前述した通り、ヴァルナとは「色」を意味する言葉であり、元々は色が白かったアーリア人とその隷属化にあった現地民が色黒だったことから「階級」という意味合いがもたれるようになった。ヴァルナは元は前述の四種類だったが、現在では四千近くに細分化している。その理由についてリズリーという学者は、「カーストの階級は現地民との混血の度合いにあり、上位カーストほどアーリア人の度合いが多くなっている」とした。同じくセナールは、「インドでは同じ階級の他の姓のものと結婚しなければならなかったからだ」とし、ネスフィールドは「職業の文化によるものだ」としている。インド哲学者中村元はこれらの説について、どれが絶対的というわけではなくそれぞれ影響し合っているとみている（『古代インド』）。

それではその中でバラモンが王族をもしのぐ権威を持ちえたのはなぜか。それは彼らが祭祀を通じて神々と交感し、その庇護を人々

に与えられるからである。インドの風土は大雨・暴風・洪水・旱魃と自然が圧倒的暴威をふるい過酷な環境である。このような環境では人間の意志力など小さなもので、人間の技術的努力よりも自然を操る神々への霊力に頼るほかないと考えられるようになり、したがって祭祀が重視されるようになった。

中村元は「「学識あり、ヴェーダに精通するバラモン」は「人間である神」として尊崇された。そうして、祭祀によって神を満足させ、布施によってバラモンを満足させるならばこの領主の神々は人を天の世界に導くともいう。バラモンは当時の氏族制度社会において指導者の地位を占め、祭祀教学を独占していた」（中村、前掲書）と述べている。

人々の願いを受けたバラモンは神々の意向が衰えないよう護摩を焚き、供物をささげ、祭祀を行う。それにより神々は人々に恩恵を与える。これは日本の神道にも近い部分があるし、密教の護摩行はまさにこれら祭祀の仏教的、日本的変容である。その祭祀は複雑で、「一つ一つの祭祀の時刻、場所、細則、目的が事細かに規定され、一つとして意味のないものはなく正しい方法を行わないと天罰が下る」（ゴンダ前掲書）とされた。

祭祀を独占したバラモンは王族すらも従属化に置き絶対的権威を確立した。マックス・ウェーバーはバラモンの権威を氏姓霊威の典型として分類しており、バラモンは宗教だけでなく文化においてもインドにおける正統の保持者であった。中村は「バラモンは、じつに三千年余の歴史を通じてインド文化の保持者であった。インドにはかつて政治的・軍事的な統一は、きわめてまれにしか表現されなかった。にもかかわらず、インド人を社会的に統一し、同一民族としての自覚を持たせたものは実に司祭階級たるバラモンであった。インドの一般農民は、武士および商人をさほど重要視しなかったけれども、バラモンに対しては絶対的な尊敬を払い帰依してきた、農民とバラモンのこの密接な結合は、三千年余の歴史を通じて不動であり、インドの文化の主流はどこまでもバラモン文化なのである」（中村前掲書）と評している。

カトリックにおける聖職者・ラテン語・聖書の伝統、イスラムにおけるウラマー・アラビア語・クルアーンの伝統に見えるように、聖職者・聖言語・聖典の三つの伝統が宗教文化の形成には不可欠であり、バラモン・ヴェーダ語・ヴェーダの伝統のもとでインドの宗教文化が確立されていった。そしてこのバラモンの文化の中から次第に神々の世界を離れ、知識を重視し世界の根源を追究する指向が生れ出るとき、インド哲学は新たな局面を迎えることとなる。

（続く）

時論

「価値観外交」の世界観から「興亜の使命」へ

小野耕資

「トランプ大統領」が意味するもの

アメリカ大統領選の共和党候補がドナルド・トランプ氏に事実上決定した。トランプは数々の放言で注目されたが、その中には「在日米軍の駐留経費を日本が大幅増額せねば撤退する」といったものもあり、わが国にとっても無視できるものではない。トランプのこの発言は、日本の対米自立を促すというよりは「日本がアメリカから一方的に見放される」状況に陥るものでしかない。むしろトランプのこの発言は、アメリカが国際的な安全保障の責任を負う「世界の警察」の役目から降りたがっているというアメリカ社会の「本音」が垣間見える。その背景にはアメリカの国力の低下、国際的影響力の低下、冷戦の終結によりアメリカ依存への必然性がなくなったことなどさまざまな要因が考えられる。いずれにしても、もはや冷戦時代の世界観は無論、「パクス・アメリカーナ」の国際秩序は終焉を迎えようとしている。

世界に起こる反米政権

近年、世界各国で反米政権が雨後の筍のように成立している。パレスチナ問題を抱える中東や北アフリカ地域では反米政権ができては潰されるといった歴史が繰り返されてきたわけだが、近年の反米政権はそれとはまた違った理由で成立しているように思われる。ベネズエラではアメリカ発の新自由主義による格差拡大、医療・福祉の崩壊に反発したチャベス政権が成立。反米路線を鮮明にし、南米の反米政権の代表的存在となった。チャベスの死によりベネズエラは反米路線を修正するようだが、反米政権の存在はこれで終わるものではなかった。

豪州ではターンブル政権が成立し、それまでの親米路線を大きく修正することになった。

フィリピンではドゥテルテ政権が誕生した。ドゥテルテは南シナ海における中華人民共和国との争いに対して米国の介入を嫌い、話題になった。ドゥテルテは麻薬や犯罪に対する厳しい対応と放言で話題になり「フィリピンのトランプ」と呼ばれたが、麻薬や犯罪の温床である貧富の格差や貧困への不満、汚職の横行への憤りがドゥテルテの「世直し」への大きな期待となって表れた形である。

ターンブル政権もドゥテルテ政権にも、中華人民共和国の影がちらつく政権ではある。この状況を受けて「アメリカがダメなら次は中華人民共和国だ」といった薄っぺらなことを言いたいのではない。大事なのは日本の外交を考えるうえで、「自由、民主主義、法の支配をアメリカとともに守る」といった旗印はもはや通用しない過去のものであり、その

構想を打ち出した「自由と繁栄の弧」構想はもはや破綻しているということである。価値観外交の時代が終わりを告げたことと、貧困、格差の解消が大きな政治課題となったことが現代の国際政治を理解するうえで欠かせない視点であろう。

安倍談話の欺瞞

翻ってわが国では、安倍総理が戦後七十年談話、通称「安倍談話」を発表した。その談話は未だに「自由と繁栄の弧」構想の時期と全く変わらない、価値観外交による世界観に彩られている。安倍談話では、「私たちは、国際秩序への挑戦者となってしまった過去を、この胸に刻み続けます。だからこそ、我が国は、自由、民主主義、人権といった基本的価値を揺るぎないものとして堅持し、その価値を共有する国々と手を携え」ると表明しているのである。

改めて語るまでもないことだが、外交は自由、民主主義、人権などという薄っぺらな価値観で決まるものではなく、国際情勢や国益など、さまざまなことを総合的に判断して決められるべきものだ。もちろん不自由ではない方が良いに違いないし、独裁者などいない方が良いに決まっている。自国民を迫害する政権など論外である。しかしその程度のことを外交的価値観として、しかも普遍的なものとして打ち出すことに強い違和感を覚える。

「自由、民主主義、人権」とか「法の支配」等を普遍的な価値観とみなす価値観外交というのはアメリカのネオコンが生み出した概念である。それに安倍や麻生といった自民党の主要政治家が共鳴したのだと言われる。ネオコンは「自由、民主主義、人権」へのイデオロギー性を抱えるとともに、裏面ではグローバル資本と蜜月関係にあり、グローバル資本の便宜を図ることに腐心してきた。各国の文化、歴史、信仰、国民性を鑑みず「自由、民主主義、人権」を普遍的な概念とみなし、それを他国に押し付けることを恥としないネオコンの態度は、各国民の生活に根付いた商売を簒奪するグローバル資本の態度とそう変わるものではなかったのである。これへの反発が、各地に反米政権を誕生させることになった背景である。

安倍談話といわゆる「日本国憲法」

安倍談話の論理構造はいわゆる「日本国憲法」の世界観と酷似している。「日本国憲法」前文では「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占め」ることを目標としており、「自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なもの」だとしている。日本が敗れたのは「専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会」への挑戦者となってしまったからであり、そうした「人類普遍の原理」に基づくためであれば、「これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する」ことも辞さないのである。「国際秩序の挑戦者となってしまった過去」を反省し、「自由、民主主義、人権といった基本的価値を揺るぎないものとして堅持し、その価値を共有する国々と手を携え」るとした安倍談話はいわゆる「日本国憲法」の世界観そのものであり、戦後レジームの克服に何ら寄与しておらず、到底支持できるものではない。

安倍談話は「自由、民主主義、人権」を絶対視する価値観を戦前にまで当てはめ、戦前の歴史を否定し、「自由、民主主義、人権」を共有する国と手を携えることで世界平和が成し遂げられるという全くのお花畑的世界観を表明しているに過ぎない。特に日本における「価値観外交」論者は利害関係が複雑に絡み合い謀略が渦巻く国際政治のどろどろした部分を何も見つめていない点で罪は重い。そのような世界観は日本が国際社会で生き残るにあたって有害でしかない。

安倍総理は安倍談話の最後を「終戦八十年、九十年、さらには百年に向けて、そのような日本を、国民の皆様と共に創り上げていく。その決意であります」と結んでいる。「そのような日本」とはどのような日本か。どう読んでも安倍総理は「「自由、民主主義、人権」の価値観を共有する国と手を携えることで世界平和に貢献する日本」を思い描いているとしか読めないのである。このような子供でも信じないようなことを平然と言える総理大臣で日本は大丈夫なのだろうか。外交上の深謀遠慮があるのかもしれない。それはわたしにはわからない。だが、それにしてもこのような近代的価値観に対する疑いの念が全くない世界観はあまりにも軽薄で、到底承服できるものではないのである。

興亜論が提示する使命

これまで述べてきたように、現代の国際社会を考える上では、二つの視点がなければならない。

一つは冷戦以降続いてきた「価値観外交」はもはや全く通用しないということである。今後の国際社会は好むと好まざるとにかかわらず、利害関係や謀略の中で各国がしたたかに自らの国益を得ようと競いあうものとなるだろう。わが国の政界はそうした時代への適応が未だに不充分ではないかと思えてならない。

二つ目は、グローバル資本がもたらした貧富の格差、貧困の拡大は政治をも動かす大きな論点となったということである。もちろんそれは物価に比した所得の低下により生活が苦しくなるといった問題でもあるのだが、「ヒト・モノ・カネ」が自由に動き回り、それまでの文化や歴史に根付いた秩序を破壊したことによるアイデンティティの危機も同時に孕んでいる。人々の不安や憤りが、ポピュリズムの蔓延にもつながっているのである。

そのうえで、現在の安倍政権は前記二点を踏まえていないことに加えて、いわゆる「日本国憲法」の世界観から一歩も出ておらず、到底支持できるものではない。

先ほど、今後の国際社会は国益と謀略に翻弄される時代になると書いたが、それは謀略渦巻く世界観に甘んじるということではない。国益と謀略の時代もまた、パワーポリティクスに基づく西洋発の世界観に他ならないからだ。短期的にそういう時代の到来への備えを怠ってはならないが、同時に長期的に西洋発の近代的価値観を克服する遠大な理想を抱かねばならない。

国家は単に存在するだけの存在ではなく、自らの生存を超えた使命を持つ。わが身の安全ばかりでは祖国の魂を維持することはできない。「国家の生存を超えた理想」を、わが国の先人たちは胸に抱き、その実現に邁進してきた。興亜論はその代表的存在である。興亜論は社会が自然に育む秩序を重んじ、各その処を得る八紘為宇を理想としてきた。それぞれの文化、伝統、信仰を重んじ、歴史的に自然に生み出された秩序を重んじ、互いにそれを尊重していくことが必要なのである。謀略渦巻く国際関係の中で、「自由、民主主義、人権」に代わる旗印を掲げることは、われわれに課せられた使命でもある。われわれは「価値観外交」の世界観を擲ち、「興亜の使命」を自覚せねばならないのである。

史料・『興亜会設立緒言』

『東亜先覚志士記伝』に曰く、「東亜問題に関する有志の團體として第一に指を屈すべきものは興亜会である。これは明治十三年の初春の頃、渡邊洪基、宮島誠一郎等の発起によって設立されたもので、会長には長岡護美、副会長には渡邊洪基が就任し、その名の示す如く亜細亜を興すといふ思想を基調として生れたものであった。・・・同会に封じては畏き邊より年々御下賜金があり、内務省大久保利通も後援し、同会経営の興亜学校では興亜主義の思想を鼓吹すると共に我国最初の支那語学生を養成したのである。当時の学生中には支那問題の先覚者たる川島浪速、宮島大八及後年支那で久しく領事総領事等を勤めた瀬川淺之進等もあった。これらの人材を出したことだけによっても興亜会の生命は今に滅びないといってよい。傳へられる所に依ると、當時興亜会といふ会名に封し、在京支那の有力者中に「小なる日本が興亜などゝいふのは生意気だ」と批評した者があった為め、会員中には会名を変更しようといふ議を唱える者が現はれ、宮島誠一郎等は「そんな批評に動かされる必要はないから矢張り興亜会の名を持続するのがよい」と主張したのであるけれど、命名変更を可とする者が多数で、遂に亜細亜協会と改称するに至ったのである。斯くして亜細亜協会は其後長く続いたのであるが、後ち同文会の創立されるに當りて之と合併し、会の精神は同文会に継承せられることゝなった。」

此処では以下に、この興亜会の「設立緒言」を掲げる。本文は同会の幹事である曽根俊虎の起草によるものとされ、原文は漢文であるのを筆者が読み下した。（文責・折本）

窃（ひそ）かに惟ふ方今亜細亜全洲の大勢、国相依らず人相輔けず、萎靡倫薄す。

此時に当り全洲の志士誰か慨憤せざらんや。夫れ欧美諸洲の能く隆盛を致すは、蓋し言語相通じ緩急以て互いに相維持すべきに由るなり。嗚呼我全洲諸国をしてかくのごとからしめば、則ち衰頽を振興し隆なること欧美諸州に比す、豈其の難からんや。亜細亜諸国能く紀綱を張り独立せるは唯本邦と支那なり。本邦の交わりを支那に於いて結ぶこと既に久しく、其の通信貿易に於いて関係する所は、重且つ大、固より欧美諸邦の比に非ざるなり。然して両国の情勢未だ孚（まこと）ならず猶隔靴の憾有り。今日の急務は両国の志士を協合共謀して正道を興し、衰頽を拯（すく）ふに在り。則ち先づ其の言語を通ぜざるべからず。本邦欧美諸洲の語を能くする者は之有り、支那の語を能くする者は甚だ少きは何ぞや。未だ学舎を設けざれば也。豈遺憾ならざらんや。

吾輩痛憤自ら止む能はず、是に於いて今興亜会を設立し其の学舎を本邦東京に於いて立て、将来亦一校を清国上海に於いて設け、而して廣く両国の士を会し言語相伝え情勢相通じ以て大いに講求する所有らば、志士苟も遠くに馳せて、近きを遺（わす）るの悔なし。則ちアジア全洲の大勢を振興するは其れ庶幾（ちか）き乎。

明治十三年二月

興亞會創立委員

會長　長岡護美
副會長　渡邊洪基
幹事　曾根俊虎
仝　金子彌平
仝　艸間時福
委員　佐藤暢
仝　宮崎駿兒
仝　樫村清德
仝　前田獻吉
仝　小牧昌業
仝　桂太郎
仝　白井政夫
仝　荒木卓爾
仝　東次郎
仝　伊集院兼良

興亞會設立緒言

窃惟方今亞細亞全洲之大勢國不相依人不相輔萎靡倫薄當此時全洲志士誰不慨憤者哉夫歐美諸洲之能致隆盛者蓋由于言語相通而緩急可以互相維持也嗚呼使我全洲諸國若此則振興豈難哉而比歐美諸洲豈其難哉亞細亞諸國能張紀綱獨立者唯本邦與支那也本邦之結交於支那既久矣其于通信貿易所關係者重且大固非歐美諸邦之比也然兩國之情勢未孚猶有隔靴之憾焉今日之急務在兩國之志士協合共謀以正道而拯衰頽則不可不先通其言語本邦能歐美諸洲之語者有之而能支那之語者甚少何也用未設學舎也豈不遺憾哉吾輩痛憤不能自止於是今設立興亞會立其學舎於本邦東京將來亦設一校於清國上海而廣會兩國之士言語相傳情勢相

連載　大亜細亜医学の中の日本①

坪内隆彦

西洋医学の発展が進む一方、それを補うものとして東洋医学の役割に改めて注目が集まっている。では、東洋医学の根底にあるものとは何か。

明治以降、西洋医学が急速に浸透したわが国においても、東洋思想への回帰が進んだ昭和維新期には、改めて大亜細亜の中の日本医学の発展を捉えなおすという視点からの研究が進んだ。その一つが、小泉栄次郎が昭和九年に編んだ『日本漢方医薬変遷史』（藤沢友吉商店）である。本稿では、同書に基づきながら大亜細亜の中の日本医学の歴史を振り返ってみたい。

わが国伝統の医学は、「皇医学」と呼ばれてきた。その起源はどこにあるのだろうか。歴史家たちは、『古事記』に掲げられている神皇産霊神（かみむすびのかみ）が、大穴牟遅神（おおなむじのかみ）が火傷をしたのを哀み、蚶蛤（蚶は赤貝）で治療したこと、また大穴牟遅神が因幡の白兎のために蒲黄（ガマの花粉）を塗って治療したのを皇医学の起源としている。

また、『日本書紀』には、大穴牟遅神は少彦名神（すくなひこなのかみ）と力を合わせて天下を経営し、また蒼生、畜産のために、療病の方を定め、また鳥獣昆蟲の害を防ぐために、その「禁圧の法」を定め給うたとあり、歴史家はこの両神を皇国医薬の始祖としてきた。

一方、わが国の医薬は朝鮮半島、中国から影響を受けて来た。すでに、允恭天皇三（四一四）年、天皇の病気を治療するために、新羅から金武という医者を招聘している。金武の治療によって允恭天皇は健康を回復された。天皇はこれを厚く賞して金武を新羅に帰国させた。これが、朝鮮半島からの医薬流入の始めと考えられている。

雄略天皇三（四五九）年には、天皇詔して良薬を百済にお求めになり、百済王は高麗の名医であった徳来を日本に送った。こうして徳来は難波に住むこととなり、以来彼の子孫は代々医を業とし「難波薬師」と称せられるようになった。

欽明天皇十三（五五二）年には、百済王がわが国に使者を送り、仏像、仏具、経典を献上した。新羅が百済の領土であった漢江流域に奇襲攻撃をかけたのは、翌五五三年のことである。百済王は、わが国に援軍を依頼してきた。わが国はこれに応じ、百済から医、卜、易の博士を交代で来朝させることになった。

こうして五五四年、百済から医博士の王有陵陀（おううりょうだ）と採薬師の潘量豊丁有陀（はんりょうぶちょうだ）が来日した。ちなみに、弘前大学医学部の松木明知氏と中世ペルシャ語に精通した京都大学名誉教授の伊藤義教氏の共同研究によって、王有陵陀、潘量豊丁有陀はともにイラン系だったこと↘

今年はリカルテ生誕一五〇年

今年は、フィリピン独立の英雄、アルテミオ・リカルテの生誕一五〇年である。リカルテは、今から一五〇年前の一八六六年十月二日に生れた。師範学校を卒業後、地方の小学校の校長を務めていたが、フィリピン独立革命に参画し、エミリオ・アギナルドの下で、スペインとアメリカに対する独立闘争を指揮した。

アルテミオ・リカルテ

米比戦争の結果、フィリピンがアメリカによって完全に制圧されると、リカルテはグアムや香港に追放され、長きにわたる獄中生活を強いられたが、巨額の年金と豪奢な邸宅と引き換えにアメリカに降伏して忠誠を誓ったかつての英雄、アギナルドとは対照的に、最後まで星条旗に屈しなかった唯一の将軍として知られている。

第一次大戦の勃発に際して、当時香港に拘↘がわかっている。

つまり、わが国には6世半ばにペルシャ系の医学も流入していたのである。

束されていたリカルテは、英国官憲の追求を逃れて日本に亡命した。そのとき、リカルテ亡命の手助けをしたのが、ビハリー・ボースの依頼を受けた犬養毅や頭山満といった大アジア主義者たちであった。それから歳月は流れ、リカルテは横浜山下町で静かな余生を過ごしていたが、大東亜戦争の勃発によってついに八十歳の高齢をおしてフィリピンに帰還し、山下奉文大将率いる我が軍と共に戦った。そして戦況が悪化の一途をたどるなか、一九四五年七月三十一日、ルソン島北部のジャングルにおいて、波乱の生涯に幕を閉じたのである。

こうしたリカルテの偉大な足跡は、フィリピンの独立史にとっては勿論、日比両国の友好関係、そして全アジアの独立の歴史においてもかけがえのない遺産となっている。そんなリカルテの生誕一五〇年を記念し、当会では彼の功績を顕彰する祭式を催行予定です。日時等の詳細は当会のサイト等で追って告知致します。

横浜山下公園に立つ
リカルテの記念碑